慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 日本現在宋元版解題史部(上) |
| Sub Title | |
| Author | 尾崎, 康(Ozaki, Yasushi) |
| Publisher | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 |
| Publication year | 1992 |
| Jtitle | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.27 (1992. ) ,p.235- 290 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000027-0235 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 日本現在宋元版解題　史部（上）

尾崎　康

## 例　言

一　この稿は、阿部隆一「日本国見在宋元版本志経部」（斯道文庫論集第一八輯　一九八二年）に続けて、国内に伝存する宋元版の史部に属する本を網羅的に著録しようとするものである。従来の書目書誌の類に宋・元版と著録されて来た本は、明版と審定されたものも原則的に取上げた。

一　同版本が、阿部隆一著「増訂中国訪書志」（一九八三年　汲古書院刊）、および静嘉堂文庫編「静嘉堂文庫宋元版図録」（一九九二年　汲古書院刊）に著録されているものは多くこれに拠り、基本的な事項以外、重復する記述はできるだけ省略した。すなわち、同版本が台湾に存在する旨が指摘されていれば、それは「中国訪書志」に著録されていることを意味する。また、その際に作成された宋元版刻工名表ノートの恩恵に預ったことを特記する。

一　正史類についてはすでにその多くを本論集の各輯に発表し、その他も含めて、拙著「正史宋元版の研究」（一九八九年　汲古書院刊）に纒めたから、ここには再録しない。ただ遺漏、その後の発見本等についてのみ、補訂として記した。同様に資治通鑑については、「宋元刊資治通鑑について」（斯道文庫論集第二三輯　一九八八年）に発表したから、これに委ねる。

一　一連の調査に際して、秘蔵の貴重典籍の閲覧および複写を許可された所蔵者、関係者各位に深く感謝の意を表する。

一　この調査研究は主に一九八四年から九二年にわたったトヨタ財団創立一〇周年記念助成によるものである。

## 正史類（補訂）

**史記**一三〇巻（欠巻八二～八八）　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　唐張守節正義　元至元二五年吉州彭翁崇道精合刊　三二冊（余二冊）

大谷大学図書館蔵

後補藍色表紙（二四・七×一六・五チセン）、室町後期の装訂に裏打、包背装。題簽「史記序目録帝紀」「史記帝記　一」のように墨書し、右下方に「禿𥁕」（陰）小朱印を捺す。第二冊以下、右半に目録題簽（墨筆）。

史記索隠序、史記正義序、補史記序、三皇本紀、史記集解序、史記正義論例謚法解、史記目録に次で、「五帝本紀第一（隔六格）史記一」。左右双辺（一八・一×一二チセン）。一〇行、二二字・注小字双行。版心　線黒口、黒双魚尾、上象鼻に大小字数、題「史一」「史紀一」等。耳格に篇名。

朱筆で句点、朱引、勾点、圏点を、墨筆で返点、振・送仮名を施すほか、付箋に「索隠本云々」等と書入れされ、朱句点等もある。

巻第一第三一葉、巻六一（伝一）一～七葉が補写。巻二二第八八葉が欠。

目録末に「安成郡彭寅翁／栞于崇道精舎」、巻一四（年表二）末に「安成郡彭寅／翁鼎新刊行」、巻七二（伝一二）末に「皆至元戊子安／成彭寅翁新栞」、巻一三〇（自序）末に「至元戊子菖節吉／州安福　彭寅翁／新刊于崇道精舎」の双郭木記がある。尾題は上半部が欠け、「史記一百三十」とだけある。

蔵印は各冊首尾に「法勝院」、しばしばやや大と小の二種の「禿／𥁕」（陰）、冊尾に「印」。東福寺法勝院旧蔵。

余の二冊は、「元版史記源委冊」「天禄琳琅元版史記経籍訪古志史部」と題して、史記に関する古記録類を輯めたもので、「東福寺宝勝院王峰芳卿光隣和尚寺沢本　又補写ニ安枕ノ二字アリ光璘……二九六〔臨済宗〕京都東福寺ノ僧ナリ、光璘字芳卿ト云フ、圭甫瓚ニ参シテ法ヲ嗣ギ、大永四年東福寺ニ主トナル、天文五年六月十四日寂ス、宝勝ニ塔ス」の一節がある。

又（存巻九七）　一冊　　中央大学図書館蔵

後補紫色絹表紙（二七×一六・二ｾﾝﾁ）、金鑲玉装（料紙高さ二一ｾﾝﾁ）。巻頭副葉紙に「史記列伝第三十七酈生陸賈伝十一／葉ニシテ巻末ノ蔵書印ハ有名ナル山東ノ／蔵書家楊氏ノ蔵書ハ満／鉄カ数万円ヲ投シテ購入シ之ヲ大連図書館ニ／収メタリ」と墨書する。「宋存／書室」「東郡楊氏鑑／蔵金石書画印」（陰）（楊氏海源閣）の蔵印。

**後漢書**九〇巻　劉宋范曄撰　唐李賢注　志三〇巻　晋司馬彪撰　梁劉昭注（欠巻一～四・伝九～三二）〔南宋前期　建〕刊　一一冊　　内閣文庫蔵

後補灰褐色表紙（二二・六×一五・八ｾﾝﾁ）、題簽「後漢書紀五之十下」のように墨書。右肩に「昌平坂／学問所」墨印。現在、志・伝・紀の順に冊次を通すが、以下、本紀から著録する。「帝紀巻第五（隔三格）范曄（隔三格）後漢書五」。左右双辺（一八・二×一三・一ｾﾝﾁ）、一四行、二五字・注文小字双行三〇字。版心　白口、稀に黒口、時に上象鼻に大小字数、双黒魚尾、題は「後漢紀・後漢己・後漢・後漢帝己・後漢伝・後列・后伝・後漢志・後志・后後志」等。刻工名はない。欠葉が巻六五第六葉、志の序一一裏・志一一三～五葉、三一二、七一四。補写葉が紀一〇下一一二、伝七一一二・一三、四二一一二、志三一二、七一四。字様はこの期の建刊本の弊として後半にやや粗略なところもあるが、全体に整っている。

宋諱欠筆は玄眩朗 敬驚 殷 匡 恒 貞楨徵 讓 桓完 構 慎 字に行われ、敦郭にはない。

巻五首に「広範」、同尾に「見合于家本訖」、巻三九末に「見合于点本少々加首書了／弘安第九仲春初九空」、巻七八末に「見合于点本了」、巻八一末に「一見了」、六七末に「見訖」と朱書。朱筆句点・合点・朱引・校語・釈語等の頭注があり、稀に墨筆の頭注も記される。上部が少しく裁断されている。

「宝勝院」印が旧装の各冊首尾にあるほか、判読不明の四字の方印が捺され、さらにしばしば巻首に五・一×一・九ｾﾝﾁの長方印を塗沫して、多くはそれに「浅草文庫」印が重ねられている。これと同じ大きさの切取った痕跡もある。他に「昌平坂／学問所」（墨）「文化辛未」「内閣／文庫」印。

尾題は「後漢書列伝巻第八十」、続いて「范曄後漢書凡九十篇」云々の総目があるが、半ば欠。

経籍訪古志巻三著録、崇蘭館蔵宋槧小字本と「同種」という。

現在は孤本なのに迂濶にも著録を逸したもので、拙著二九七頁に挿入することになる。

**南史** 残葉〔南宋前期〕刊　一三葉

神奈川県立金沢文庫蔵

金沢文庫旧蔵で北京図書館蔵の四巻五冊、天理図書館の古刻留真のうちの三葉、金沢文庫に残った一巻一冊の僚巻である。称名寺の倉から宋刊の南華真経注疏二葉（僚巻は静嘉堂文庫に存五巻五冊、重要文化財）とともに発見されたという。

存葉は左の通りである。

目　録　　第二五～二七葉　　（計　三葉）

巻二六（列伝一六）第三二・三三葉　　（　二　）

四五（　三五）第二一葉　　（　一　）

四六（　三六）第一一・一三～一七葉　　（　六　）

四七（　三七）第一一～二一葉　　（　一一　）

未確認であるが、目録は北京図書館に大部分があると思われ、この三葉はおそらく全二八葉中の終りに近い部分である。巻二六も同館蔵で、これらが欠葉となっているのであろう。巻四六は第一・三葉が天理図書館の古刻留真にある。巻四七も、第四葉だけが天理蔵である。

この二三葉は未装（二七・九×四〇・四ｾﾝﾁ）で、裏打ちされてある。金沢文庫現蔵の巻四八とほとんど同じ寸法である。発見時は綫装の場合のように表を前に折ってあったといわれるが、左右とも匡郭外が各五ｾﾝﾁあるから、粘葉装であったものと推定される。

宋諱欠筆はかなり厳格であるが、各一字あらわれる敦郭を欠かない。他巻も構慎字に終っているから、南宋前期刊は動かず、その期の字様の美しい浙刊本である。刻工はほとんど単字で、唯一、張定の姓名があるが、これは巻四八にもある。なお、欠画で巻四八等にみえなかった文字に、懸 驚 泓 境 樹がある。

巻二六尾の欄外に、巻四八のものと同じ「金沢文庫」の単郭大型印が捺されている。

**金史** 零本（存巻五七・五八）元脱脱等奉勅撰　元至正五年江浙等処行中書省刊　一冊　大谷大学図書館蔵

改装後補銀砂子散乳白色表紙（三三・九×二三・一ｾﾝﾁ）。白綿紙の台紙を袋綴じにし、二葉ごとに、綴じ糸いっぱいで見開きに折りひろげて、ここに本文料紙を貼付した装訂、金鑲玉。

本文首題「志第三十八（隔七格）金史五十七／（低二格）開府儀同三司上柱国録軍国重事前中書右丞相監修国史領経筵事都総裁臣　脱脱奉／勅修」。

四周双辺（二一・七×一五・一チセン）、有界一〇行、行二二字・注小字双行。版心　線黒口、双黒魚尾、上象鼻に百志・官志・志第三十八のような小題と字数を、中央に「金史五十七」のように大題と丁付を、下象鼻に刻工名を刻する。刻工名は、大用、任徳章、伯巽、沈亨、沈亨甫、阮徳中、周平甫、林茂、陳福、陳寿、楊叔章、鄔正、談茂、鄭椿、静之、徳忠。尾題「志第三十八」。

蔵印「晋府／書画／之印」「敬徳／堂書／画印」「子々孫々／永宝用」（明晋荘王鍾鉉）、「大谷大学図書館」（楕円）「大谷／文庫」。神田喜一郎氏鬯盦文庫本。

北京図書館古籍善本書目には、旧目に増加して存五四巻、存四三巻、存四巻、存一巻の四部等を著録し、その一に巻五七、二に五七・五八の両巻を著録する。百衲本のこの両巻にも晋府印がみえるが、押捺の位置が異るから、晋府は同版二部を蔵していたことになる。涵芬楼燼余書録によれば、三の四巻も晋府旧蔵というからこの本はあるいはその僚巻か。

## 編年類

**資治通鑑考異**三〇巻　宋司馬光等奉勅撰　〔元〕覆〔南宋中期　建〕刊　一二冊　静嘉堂文庫

後補薄黄色表紙（二六・六×一七チセン）、襯装。

本文巻首「資治通鑑考異巻第一」、第二、三行にかけて、「端明殿学士兼翰林侍読学士大中大夫提挙西京嵩山崇福宮上柱国河内郡開国公食邑二千六百戸食実／封一千戸臣司馬光奉　勅編集」。

左右双辺（二〇・二×一三チセン）。一一行、二〇字・注文小字双行二三字。版心　白口、双黒魚尾、上象鼻に大小字数、題は「監考幾（通幾・考幾・異幾）」、下象鼻にときに刻工名。宋諱欠画が玄朗敬弘殷匡胤恒貞徵讓勗恒慎郭等の字に残る。刻工名は路学張新立監刊　張新立刊　張先　余元甫　黄天名　黄名　黄蚤　徳先、単字の文王元肖袁黄劉蕭等。かれらの名は他の本にみえない。

「郁泰峰／己亥年／所収書」、「呉印／句驤」（陰）、「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰）の蔵印。

四部叢刊本と同版の南宋中期建刊本を、元代に覆刻したものと思われる。むろん行格は同じく、この本にやや略体字が用い

られているが、字様も似て、欠画も郭字に至っているからである。路学張新(起か)立督刊ともあるが、あるいは建寧路の刊か。

四部叢刊の底本は当時、上海涵芬楼蔵で、同燼余書録に解題がある。宋刊本の版心は線黒口で単魚尾、字数や刻工名がないが、巻二六～二九は双魚尾で字数を記し、張起立督刊等と刻す葉があるという。四部叢刊本を見ると、ほぼこの通りで、ただしそれが巻三〇の第三葉に至り、以下は補写である。そして、この四巻余が静嘉堂の本版と同版で、その前の二五巻と較べれば、本版は明らかに元代に降る覆刻本である。

一方、四部叢刊の底本は北京図書館に現蔵のようである。同館の善本書目と古籍善本書目の七三七三番の宋刻本三〇巻で、巻二六～三〇は配宋刻元修本と著録されるが、後者は行格を一行一九字と誤っている。他に考異の宋刊本は、資治通鑑、同目録と叢刻の紹興三年両浙東路茶塩司刊本（一一行二〇字）、さらに一一行二〇字本、そして一〇行二二字本が著録されるが、同館以外に所蔵を聞かず、また元刊本の存在は本版が知られるだけである。

**資治通鑑釈文三〇巻**　宋史炤撰　〔南宋〕刊　一二冊

静嘉堂文庫蔵

後補薄黄色絹表紙（二七・五×一七・一センチ）、金鑲玉装（原料紙高さ二四・一センチ）。

首に紹興三〇年三月左朝散郎権発遣黎州軍州主管学事馮時行序。「資治通鑑釈文巻第一／（低六格）右宣義郎監成都府糧料院史　炤」と題し、御製序（資治通鑑序）から全二九四巻にわたって、本文の字句を掲げてその簡単な釈文を双行に附する。

双辺（二〇・二×一二・八センチ）。毎半葉一二行、行二二～二三字・注文小字双行三〇字。版心は線黒口で、上象鼻の右左に大小字数、双魚尾の中央に「釈文一」のように題、下方に字数を刻し、刻工名はない。

避諱欠筆はきわめて少く、それと明らかなものは暅字が一例と桓字が七例の程度にすぎず、構字は見当らず、慎敦郭字は頻出するが欠かない。巻二〇・二一の唐太宗紀（通鑑巻一九二～一九九）では貞観の年号をすべて正観とし、巻一第二葉裏第九行に斉の桓公午について「威公（太公子名午威之正字胡官切犯宋孝慈淵聖御名）」と、巻一七第一二葉表第九行に梁の敬帝について「欽皇帝（犯翼祖嗣諱今改作欽）」とあるのは、雕版の際の避諱でなくて、史炤が原文において行ったも

のであろう。すなわち、敬暅桓の三字に行われているにすぎない。実は恒の欠画例が一つあるが、これは後漢の桓帝紀の標題に対するもので、明らかに桓の誤刻である。敬は前述の通り梁の敬帝紀の標題に対するもので、釈文としても通鑑の巻次を明示するために取上げないわけにゆかず、あえて「欽皇帝」と改めて避諱の旨を注記したのであろう。北宋末代の欽宗桓の避諱としては、これも前述の通り、斉の桓公を威公として二〇字の割注を加えたものがまず現れ、後に欠画が七例ある。欠画のうちの四は、通鑑で四巻にわたる漢の孝桓皇帝紀のやはり標題であるから、釈文の巻六のその箇所にあり、他の三例は烏桓についてであって、集中して出てくる。

以上いずれも原文が固有名詞で、帝諱と同字でも落せないものであり、そうでないのは真宗の嫌名の暅が一字あるだけである。なお弦泫炫眩警偵禎懲垣等の嫌名を欠画しない例があるが、その数はごく少い。これらも含めて、南宋初代の高宗までの諱・嫌名に当る文字のあることはきわめて稀なのである。一方、次の孝宗・光宗・寧宗に関する「慎惇敦郭」等の字は、むろん欠画されないまま頻繁に現れ、敦煌のごときはほぼ同文の注が何回出てくることか。すなわち、高宗以前の帝諱に当る文字は、掲げざるをえない場合を例外として、通鑑の本文から引くことも、釈文の用語としても意識的に避けているわけである。そして前述の桓公を威公と改めた際の注に「渊聖御名」ということと相俟って、この書の成立が高宗代、つまり建炎・紹興中であることと、史炤がその頃の人であることを示していると考えられるのである。

字様は中国版刻図録の図版一五九～一六六の解説にいうように「近廋金体」というところであるが、それよりやや南宋中期建刊本の風を帯びている。序の紹興三〇年刊とみるのは無理で、南宋前期刊本と推定したい。

尾題「資治通鑑釈文第三十」。

この史炤釈文が南宋前期鄂州鵠山書院刊の資治通鑑に注として採用されたことなどについては、すでに「宋元刊資治通鑑について」に詳述した。この釈文は資治通鑑二九四巻から選択して行うにはけっして要を得ているとは思えないが、胡三省注が出るまではともかくも長巻の全般に亘るものとして、一応の価値を有したかに思われる。

涵芬楼燼余書録に黄堯圃（丕烈）旧蔵の一二冊を著録するが、宋刊宋印という同版本のようであり、巻末の一葉だけが原刊に

類せずというのは元刊本を補配したものか。近刊の中国古籍善本書目によっても、宋刊本は他に北京図書館に一二行一九字本があるものの、この同版本は現存しないらしい。

**入注附音司馬温公資治通鑑詳節一〇〇巻　外紀四巻　宋**
司馬光等奉勅編　外紀宋劉恕編　〔南宋中期　建安〕
刊〔元・元末明初〕遞修　一六冊　　内閣文庫蔵

後補薄茶色表紙（二五・六×一五・四チセン）、外題「入注附音資治通鑑序目外紀一之四」のように墨書。右上方に「昌平坂／学問所」墨印。裏打補修。

資治通鑑序（注は史炤音釈と同文）。奨諭詔書、進資治通鑑表（末に元豊七年一一月進呈列銜）、温公親節資治通鑑序、元豊元年十月日司馬光君実序、劉秘丞外紀序（劉恕）、温公外紀序、通鑑釈文序（馮時行）が改丁せずに一〇葉も続く。更に通鑑帝王授受図（上中下）、五帝夏商周秦図、前漢譜系図、後漢譜系図、三国譜系図、晋譜系図、南朝譜系図、北朝譜系之図、隋図、唐譜系図、五代譜系図、（歴代帝王出自解説）。

入注附音司馬温公通鑑目録。その末に別本と同じ「以明州元本暮写刊行仍参／監中正本校定詳而不泛簡／而不遺事之首末可以精究／誠有益於学者与它本大有／逕庭伏幸　聡悉本堂謹咨」の刊語がある。

「入註附音資治通鑑外紀巻之二（隔二格）外紀（隔一三格）劉　恕」。本文首題は「入注附音司馬温公資治通鑑詳節巻之一／（低一格）周紀（隔一〇格）司馬光奉勅編」。ただし巻一尾題以下のかなりの巻は「詳節」の二字を脱し、「注」字を「註」とする巻もあり、また「入注附音司馬温公通鑑」「諸儒補注司馬温公資治通鑑」の例もあって一定しない。

左右双辺（一八・五×一三・三チセン）、一四行、二三字・注文小字双行二五字、「考異曰」と引用する場合は単行で二五字。版心は線黒口または白口、ときに上象鼻に字数を刻し、補刻葉には小黒口もある。双魚尾、題は外、外紀、監外紀、監、通監等。刻工名はない。耳題があり、避諱欠筆は、玄朗 弘殷 匡筐 恒 禎貞徵懲 樹桓完 慎 敦字に行われるが、さほど厳密ではない。貞観を正観に作る一例のほか、「祥明元年正月（貞祀仁廟諱改曰祥）」という場合がある（巻六一第六葉裏二行）。

本文は臣光曰も含めて原文のごく一部を取上げ、これに史炤の釈文と宋儒の説を注とする。全体に漫漶がかなり進んでおり、とくに後半に補刻が多い。欠葉巻三三―五・六葉、八三―九・

一一葉、補写巻八四―一八・二〇葉。

尾題「入注附音司馬温公資治通鑑詳節巻之一百」。

朱句点、朱引、欄外に別書の関連記事等を朱書。蔵印「江雲渭樹」(陰・陽)「海南秋月」(陰)「林氏蔵書」「浅草文庫」「昌平坂／学問所」「日本／政府／図書」。経籍訪古志巻三著録。

静嘉堂文庫蔵の陸状元集百家註資治通鑑詳節(南宋中期建安蔡氏家塾刊本)、巻八五～九三に補配の〔入注附音〕司馬温公資治通鑑詳節とは別版、しかし北京図書館の存八一巻二〇冊と同版であろう。涵芬楼燼余書録の二四冊もそうで、別版補配があり、北京本と同様に傅増湘跋があると言い(全文著録)、蔵園羣書題記にも跋文(別文)を録すとある。蔵園羣書経眼録には、一〇〇巻、配以他宋本(呂大著点校標抹増節備注資治通鑑一九巻)と著録される。

この本は資治通鑑から主要な記事を抜萃し、南宋初の史炤の注をわずかに附刻したもので、一〇〇巻に編成されてはいるが、量的には通鑑の一〇分の一ほどもあるまい。その成立は南宋前期か中期にかけてかのことであろうが、刊語にいう明州元本がそれであろうか。本版は南宋中期建刊本の字様を濃く残しているから、他のこの期の建刊本の例に照して、その覆刻本とみられる。明州元本を以て摹写刊行したというものの、改刻、覆刻とその間に一本が狭まれ、首尾題が一定しないのはそれがそれぞれ異った書肆で拙速に行われた結果かと思われる。

**陸状元集百家註資治通鑑詳節一二〇巻　宋司馬光撰　陸唐老集註**　〔南宋中期〕建安蔡氏家塾刊(巻二一・二二補配元末覆刻本、巻二三・二四補配明初刊本、巻八五～九三補配元初覆刻本。巻九・一〇、二五～三〇補写)　四八冊　　静嘉堂文庫蔵

後補濃藍色表紙(二五・九×一五・八チセン)、第二冊以下は後補濃紫色表紙、金鑲玉装(料紙高さ二三・二チセン)。

「陸状元集百家註資治通鑑節要」(「要」字は補写)と題して、神宗皇帝御製序、奨諭詔書、温公進資治通鑑表、温公親節資治通鑑序、劉秘丞外紀序、温公外紀序、通鑑釈文序が続き、その末に「新／又／新」鼎形印、「桂／室」爵形印(木記)を刻する。陸状元集百家註資治通鑑詳節姓氏(三葉中首二葉補写)、末に「蔡氏家／塾校正」木記。陸状元集百家註資治通鑑詳節目録。

首題は「陸状元集百家註資治通鑑詳節巻之一」。看通鑑法、

通鑑釈例図譜、通鑑帝王授受図、五帝夏商周秦図、前漢～五代の歴代の譜系図、各国都地理図、通鑑挙要暦、通鑑君臣事実分紀等があり、巻一三から外紀五帝紀に、そして巻一七の周紀から本文に入る。この巻一三以後には句点を刻し、また眉上に標題のような数字が、行三字で刻されている。

左右双辺（一八・九×一二・九チセン）。一三行、二三字・注小字双行二七字。版心は白口で、双魚尾、「監幾（監総幾）」と題し、丁付を記す。稀に上象鼻に大小字数と刻工名があり、耳題を刻する。避諱として、玄絃鉉朗 敬 弘泓殷 匡筐 恒 禎貞偵徵 讓 勗 桓完 搆構 愼 惇敦慤 廓 等の字の末画を欠く。

尾題は、巻一二〇が補写であるから、「陸状元集百家註資治通鑑詳節巻一百一十九」。この首尾題はいかにも建刊本らしく、巻によって多少の変化がある。巻五までは首尾題とも右の通りであるが、以後しばしば「註」を「注」とし、「詳」字、「詳節」の二字、「資治通鑑」四字を欠き、巻一四尾題は「陸状元集百家註」としかない。また、巻次の一〇一を「一百単一」のようにも書く。補写、補配の巻の首尾題も異る場合が多いが、それぞれのところで記す

朱筆で句点、傍点、傍線を施す。

巻九・一〇・二五～三〇の全巻と、巻七―第五葉裏・八―七・一一―一～三・三二―四・四一―一～四・五一―九～一四・六三―九裏～一〇・一〇三―一～四・一〇九―一表・一二〇―八～九が補写されている。巻一一―第五葉表と巻八九末葉（存首六字）が欠。

目録の前の木記の「蔡氏家塾校正」に関して、愛日精廬蔵書志、皕宋楼蔵書続志、儀顧堂続跋はほぼ次のようにいう。黄丕烈の百宋一廛賦の注に、李学士新注孫尚書内簡尺牘一六巻に、「蔡氏家塾校正」の六字があり、かつ趙霊均が元天暦三年本を用って校した明刊本の首に、鈔補であるが「慶元三祀閏余之月梅山蔡建侯行父謹序」があったことに照して、この本も慶元三年（一一九七）ころの蔡建侯の刊本である、と。これによって書林清話巻三の宋私宅家塾刻書には、梅山蔡建侯行父家塾慶元三禩刻陸状元百家注資治通鑑詳節一二〇巻と明記されている。

本版の字様は確かに慶元前後のもので、同年と断定するのは早計であるが、そのころ、すなわち南宋中期の刊本であることに疑いの余地はない。

全巻の末に「時乾隆十年仲秋重装建元書」と結ぶ二〇行に及ぶ手跋があり、静嘉堂秘籍志（一部略）や静嘉堂宋元版図録に

移録されている。しかし、次に列挙する蔵印にもこの期の該当者がなくて、この人物は特定できない。この跋文によると、この本は陳太堂広野先生、倪君東銘の手を経て収蔵するところとなったという。「陳与郊字広埜」と「雲林倪氏家蔵」印があり、陳氏は良いが、倪氏は雲林居士、雲林閣を号したという瓚と摸が、元末明初と清嘉慶の人であるから、一族ではあろうが両名の中間のころの印である。

その蔵印は、ほぼ古い順に次の通りである。「□流伝／勿損汚」、「陳与／郊字／広埜」、「太子太／保傅文／穆公家／蔵図書」、「雲林倪／氏家蔵」、「袁又愷／曽観」、「張氏秋月／字香修／一字幼憐」「香修」、「厳氏／修能」「元照／私印」「元照／之印」「芳椒／堂印」、「汪士鐘蔵」(陰)「汪印／士鍾」(陰)「閻原／甫」、「華印／昌際」「華印／昌際」(陰)、「青蘿」、「王氏／子貞」。後二印は比較的古いが、それぞれ単独に捺されている。

右の跋文はさらに、巻中に欠葉があるから別版本を用ってこれを塡補し、鈔補するもの一三九葉、目録を検して細く勘し、併せて汲古閣本を取って較対して完書としたこと、当時この書は数本あって、互いに必ずしも同本でなく、首題を削り補筆するところがあることなどをいう。

さてこの本は、大半が標記の通り南宋中期の建安蔡氏刊本であるが、他に次の三種の別版が補配されている。いずれも現存しない本であるが、この種の本が宋元明代にいくつも存在したことを物語る。

A　巻八五第二葉裏～巻九三

〔入註附音〕資治通鑑増節　〔元初〕刊

行格は本版と同じく一三行二三字で、匡郭の大きさも字様も似るが、やや紙質が変ってわずかに灰色がかっている。句点、眉上の標題、耳題も刻し、本文の内容にも大差がないと思われる。元刊であることは疑いなく、本版の覆刻とも思えるが、題名、巻次の異る別本であり、他に存在を知られていない本である。

その首尾題はみな首の三～四字が剜去され、巻次も真中の十を残して上下各一字が切取られ、裏に紙を充てて新たに数字が補筆されている。次のごとくである。

1　〔(四字)〕資治通鑑増節　巻八五尾・八六首尾・八八首・九二首

2　〔(三)〕註資治通鑑増節　巻八九首

3　〔(四)〕資治通鑑詳節　巻八八尾・九三尾

4 (四) 司馬温公資治通鑑増節　巻八七首尾・九〇尾・九一首尾

5 (六) 温公資治通鑑増節　巻九〇首

なお、4の巻九〇尾・九一尾の剜去の跡には、「陸状元集」と墨書されてある。また、巻次の数字の上には、必ず「王氏子貞」印（稀にすでに「雲林倪氏家蔵」印）が捺され、その一部が巻次とともに切取られる。

巻九〇を除いて首題の下方に、稀に尾題の下方にも、「唐紀二（〜九）」のように墨囲陰刻する。これは「司馬温公」の四字の有無にかかわりないが、本版（標題本）にはまったく見られない。首尾題はともかく、この九(八)巻は同版と見られる。

さて、右に掲げた正式の首尾題であるが、これを推定する資料が乏しい。13は45に照して「司馬温公」を欠くかとも思われるが、2に「註」があることによって否定される。ただし、一部に補筆されたような「陸状元集」ではありえない。「司馬温公」に冠するには、「入注附音」が考えられる。入注附音司馬温公資治通鑑詳節は内閣文庫と北京図書館に各一部が蔵されるが、ともに書名が「詳節」であり、行格が一四行二三字と一行多く、外紀四巻を除く巻数が一〇〇巻である。

さて、巻八五の第二葉裏からこのA本に入るのであるが、その繋ぎめ、すなわちこの本版と補配本との接続するところに「之迹彼」の三字を脱し、「之迹」だけが墨筆で補われている。行格が同じ一三行二三字で、字様もわずかに劣るが極似するのにこの誤差を生じたのは、小字の註の字詰がわずかに違う行があるためで、別本であることはもとより、覆刻本でもないことを示す。

このA本は、元刊の増修陸状元集百家註資治通鑑詳節と較べると、本文に増減はあるが、各巻の構成は全く同じで、内容に大きな変化はない。つまり、唐紀の各帝紀の冒頭は帝号や年代がまったく同文で始る。ところが巻九二・九三の上下二巻の則天武皇后紀は、この補配本では一巻全三〇葉に合されていて、例の補筆で首題は巻九二、尾題は巻九三とされている。その前の高祖紀は二、太宗紀は三、高宗紀は二巻と同じ巻数で、合巻にはされておらず、丁数も同様の各二〇葉前後であるが、巻八五に見えるように剜去、補筆の前の巻次が本版の約半分であるとすると、A本には他にこのような合巻の巻がしばしばあったのであろうか。

なお、この本の剜去補筆された巻次のところには、ほとんど

「王氏子貞」印が捺され、その数字に当る箇所はやはり切取られている。ただし、稀に下方の「太子太保傅文穆公家蔵図書」と「雲林倪氏家蔵」の二印がかなり大型で、ここにさしかかっている場合には、王印はない。この三印はすべて次の二本を含めた補配本だけにあり、その他の諸印は本版との双方に捺されている。巻次の訂正も乾隆の跋が書かれたときに行われたことを窺わせる。

A本の首尾題の存する一四のうち、六は首の四格を削られて「司馬温公資治通鑑増節」であるから、これらの巻を前に解題した内閣文庫蔵の〔南宋中期〕刊の入注附音司馬温公資治通鑑と対比すると、両本は別本であるが、基本的には内容がさほど変らない。本文やとくに注文に多少の出入があり、眉上の標注も、同じもの、それぞれの一方にあるものと、ほぼ三分される。巻数が内閣文庫の方が一〇〇巻と二〇巻も少いのは、首に看通鑑法の類がなく、図・暦が簡略でこれらが序目のうちに収められ、外紀四巻を経て直ちに巻一周紀に入るからである。すなわち本版をこれと同じ数えかたをすると、外紀を除いて通鑑周紀は巻一七から始るから、結局一〇四巻となって四巻の差とかなり近いものになる。しかし巻次の仕立てから別本であることに相違はなく、といってこのA本とも唐紀の巻次が合致するわけではない。本版は唐紀が巻八五から始っていたのに、内閣文庫本は巻六六であり、前述のようにA本の巻八五の尾題は塗沫したうえに「八十上」と墨書されているが、もとは「四十一」と見えるのである。また本版と内閣文庫本は則天武后紀が上下二巻であるが、A本は一巻で、それをごまかして首題が巻九二、尾題が巻九三とされている。なお、内閣文庫の入注附音司馬温公資治通鑑評節は武后紀は巻七三、七四となる。

すなわち、このA本は（　）司馬温公資治通鑑詳節と題するものの、内閣文庫の入注附音司馬温公資治通鑑増節とは別本であることが明らかである。しかし、本版も含めてこれらの本文は基本的に極似しており、すべて同系統の本であろうから、このことは以下にBC本を取上げたあとに総合して述べる。

B　巻二三、二四

増修陸状元集百家註資治通鑑詳節　〔元末〕刊

巻二三、二四の二巻には、次掲の「増修」の二字を冠した〔元末〕刊の三行二七字本（二―六二本）が補配されている。次掲本にこの同巻があって、対比したところまったく同版であるが、ただしこの両巻にはもともと「増修」の二字がなく、本

版とまったく同じ題名であり、（巻二三は「詳」字を欠く）、巻次も異らない。ところがここでは両巻とも首題一行が一度完全に剜去され、上三字と巻次とを削除して、更めて「集百家註資治通鑑（詳）節巻（之）」を第一格以下に貼り、さらにその下に二三、二四の巻次を墨書する。また尾題は、「陸状元」の三字と剜去して空白のままとし、巻次は同様に切取ったうえで同じ数字を墨書している。これらの巻次のところには、やはり「王氏子貞」印がある。その他の諸印も押捺されている。

欠巻を相似た本で補うのは当然のことであるが、このようにまったく同じ首尾題と巻次とをなぜ操作したかは理解できない。王子貞印には穴が空いているから、この修正は全巻を整えるために手跋の乾隆一〇年に行われたものと思われるが、巻一以下に「増修」と謳うように、内容に多少の増減があって別本ではあるものの、あえてそれを明らかにする必要はあるまいし、むしろ補配と見せかけない方が得策というものであろう。とすると、それより以前にA本との関係で、とくに「陸状元」の名を消して、題名や巻沢を合わせたかということになるが、これも現在からは考えられない。

C　巻二〇第二一葉裏・二二葉（末葉）、巻二一、二二

増修陸状元集百家註資治通鑑詳節　〔明〕覆〔元末〕刊本

Bと同版の次掲本と較べると、別版ながら行格は同じく、明初のその覆刻本と見られる。巻二一の首題は「陸状元集百家註資治通鑑詳節巻二十一」、巻二二は「詳」字を欠き「巻之二十二」で、尾題もこれに準じ、いずれも次掲本と異らない。

この本は他に現存しないから、版式を略記しておく。左右双辺（一九×一三ｾﾝﾁ）。版心はほとんど破損し、多くはそれがその左右の本文一～三行の天地の数字に及んでいるが、わずかに残ったものから見て版心はやや巾広く、「監二十二」のように題したらしい。次の〔元末〕刊本（二―六二）と同じく耳題、眉上標記、句点を刻する。この本には題や巻次を剜去するところがなく、王子貞印もない。

本版の手跋に汲古閣本と対校したとあったが、これは明末汲古閣刊の陸状元増節音註精議資治通鑑一二〇巻で、目録上の首に、宋会稽陸唐老集註、明海虞毛晋訂正とある。総巻数は本版と同じ一二〇巻であるが、その構成は異って、巻一九から外紀に、巻二一から通鑑周紀に入る。本文は増補されていて、巻末に考異数葉が附される。八行一七字の大字本である。

以上、本版とそれに補配された三本、さらにその一に近いかとみられる入注附音司馬温公資治通鑑、また汲古閣本と、本文や注に多少の増減はあるものの、基本的には同一の本である。すなわち、陸唐老が資治鑑通二九四巻から要所を抜萃し、おそらくは史炤の注（釈文）を挿入した本が、あるいは陸状元集百家註資治通鑑節のような題で刊行されたものを基とし、以後、元明前期まで建安の各書肆が題に増節、詳節を称し、また増修、入注附音を冠し、ときには陸状元の名を削って、さらに本文や注にも多少の手を加えて、新版を装って科挙の参考書として出版が重ねられたものであろう。本版は巻ごとにわずかながら題名を異にするから、原刊本ではなくてその一であり、慶元ごろの刊とすればそのうちの比較的早い印本であろうかと思われる。

**増修陸状元集百家註資治通鑑節** 一二〇巻　宋司馬光撰

陸唐老集註〔元末　建安〕刊　三二冊　静嘉堂文庫蔵

後補金切箔散黄色表紙（二六・五×一六・×チセン）、襯装。遊び紙に「顔氏家訓曰…」の墨印（後掲）。「陸状元集百家註司馬温公資治通鑑」と題し、次行に三格を抵して神宗皇帝御製序、そして温公進資治通鑑表（列銜）、温公親節資治通鑑序、劉秘丞外紀序、温公外紀序、通鑑釈文序と続き、その末に宋刊本と同じ「新又新」「桂室」の鼎形と爵形の木記が、前者より行が追いつめられてやや小型である。さらに、敘撰十七史人姓氏、敘註十七史人姓氏、増修陸状元集百家註資治通鑑詳節目録。この目録の首題の次、次々行に、会稽陸唐老集註、建安蔡文子校正とある。

首題は「増修陸状元集百家註資治通鑑節巻之一」。基本的にはこれが巻一二までで、巻一三～三五と巻一一～一一五は陸状元集百家註資治通鑑詳節、巻三六～九〇と巻一一九・一二〇が増修陸状元集百家註資治通鑑詳節、巻九一～一一〇が陸状元集百家註通鑑詳節である。他に尾題も含めると「註」を注とし、「増修」と「詳」の有無の組合せ、また陸状元資治通鑑詳節、通鑑増続詳説と称するものもあり、建安の書肆が先行する本を勝手に覆刻、あるいはわずかに手を加えて刊行した際に、題もそれらしく改めながら首尾一貫しなかった例である。

左右双辺（一八・四×一二・七チセン）、一四行、一三字・注小字双行二六～二七字。巻一七～三五は一三行。版心　細黒口、双黒魚尾、「監（鑑節、ア、監節）幾」と題し、丁付。巻一七～二六などに、正、郄、梁三　の刻工名がわずかにあるが、これ

は版心がやや広く、明初の補刻葉であろうか。大小字数もごく稀。巻一七以後、眉上に見出しの標記と左方に耳題を刻する。玄絃朗 殷 匡 恒 暅 禎 貞 徵 構 愼 敦 燉 等の字に宋諱欠画が残るが、前掲の宋刊本よりはるかに少い。

本文の内容であるが、巻二の国都地理図は、宋本が歴代の諸朝ごとに掲げたのに対して、この元刊本は歴代国都地理図、五代諸国僭拠図の二葉（表裏）だけで、巻三の挙要暦も周代から省略が入っている。一方、巻六～一二の陸状元通鑑君臣事実分紀綱目や、通鑑周紀の始まる巻一七から三五までは、十三行で、句点を刻すように、宋本とまったく違わず、その覆刻と考えられる。以後は本文に多少の増減があり、「増修」と冠した申しわけのような形になっている。このような関係から、巻一六以前、とくに巻二〇代、巻五〇代などに異版かと感じられる要素が多少あるが、全体としては一貫したものがあり、別版、後修の葉は含まれていないと見られる。

朱句点・朱引、黄土色の句点、墨句点・圏点が施され、眉上にもほぼ三筆の書入れがある。

蔵印は、首または尾の副葉紙に「顔氏家訓曰借人典籍皆／須愛護先有欠壊就為補／治此亦士大夫百行之一／或有狼籍几案分散部帙／多為童幼婢妾所点汚風／雨犬鼠所毀傷実為累徳」、巻六一尾に「曹広心／之印」（陰）、巻一一一首に「夢華／斎／珍賞」、そして「臣陸／樹声」（陰）「帰安陸／樹声叔／桐父印」。

## 又　零本（存巻一～六）　一冊

東京大学東洋文化研究所蔵

新補紺色絹表紙（二六×一六・五チセン）、金鑲玉装（料紙高さ二二・五チセン）。序目を欠き、巻一から首六巻を存する。「天禄／継鑑」（陰）「天禄／琳琅」「乾隆／御覧／之宝」（楕円）、「芹城閔氏叢／桂書屋収蔵／書画之印」「璞先居士／閔国勲／曽経読過」各印。天禄琳琅書目巻九（後編）の元版史部に三二冊本が著録されるが、印章については触れるところがない。

同版本は台北の中央図書館北平蔵に、存六の巻六冊、存四五巻三冊、存四一巻五冊がある（中国訪書志三一三～四頁）。本版の明初の覆刻本があることは前述した。大陸には上海図書館に一二〇巻三二冊、北京大学図書館に存一〇一巻一三冊、北京図書館に存二〇巻二冊、南京図書館に存二一巻六冊がある。上海、北京大の二部は実査したが、前者は完本ということであるものの、一部に明初の覆刻本が補配されている。

**資治通鑑綱目集覧**五九巻　綱目　宋朱熹集覧　元王幼学撰

〔明景泰元年（一四五〇）魏氏仁実書堂〕刊（巻一～四・七・八・四六補写）　二六冊　　宮内庁書陵部蔵

後補茶色表紙（二四・一×一五・七センチ）、題簽「資治通鑑綱目周秦　一」のように墨書。

首四巻が補写で巻五の首題が「資治通鑑綱目第五（起辛未漢武帝元封元年尽己未漢宣帝元康二年）凡」、ただし首四字は破損している。

双辺（二一・四×一三・一センチ）、一二行、二八字・注文小字双行二二字。紀年干支は眉上に突出する。版心線黒口（やや粗）、双黒魚尾、「目五フ」の題、丁付。「集覧」「考異」と墨囲の次の文が小字双行。

標記の補写巻のうち巻四六には別に一〇行一六字の明洪武二一年梅渓書院刊本（後印）が補配されている。他に巻四〇第三二葉、四二第三九葉以下が欠。

前半に朱筆の句句点、朱引、返点、送仮名が、墨筆で返点、送仮名、眉上にイ本との校字が注記等が書入れられている。

尾題は「資治通鑑綱目第五十九」。

「妙覚寺常住日典」印。「宮内省／図書記」。

この本は首に朱熹の序と王幼学の叙例を欠くが、鉄琴銅劍楼元本書影には、この同版本の序末の「歳在上章敦牂孟夏／魏氏仁実書堂新栞」という木記が録されている。北京図書館古籍善本書目、国立中央図書館善本書目、更には中国古籍善本書目がこの上章敦牂（庚午）を洪武二三年を越えて景泰元年に繋けており、ここでも字様などからみてこれに従う。

**通鑑前編**一八巻　通鑑前編挙要二巻　宋金履祥撰　元大暦元年（一三二八）序刊〔明〕修　二〇冊　　静嘉堂文庫蔵

後補淡褐色表紙（二九・七×一八・八センチ）、襯紙を挿むが、料紙より大きい（料紙高さ二七・八センチ）。

首に天暦元年一二月の許謙の通鑑前篇序、粛政廉訪使允中の（進通鑑前篇）表、至元一七（一二八〇）の金履祥の後序がある。

本文巻首「通鑑前編巻之一／（低一三格）金履祥編」。左右双辺（二二・七×一四・九センチ）、一〇行、二二字・注文小字双行。版心　線黒口、魚尾がなく、横線二を引いて上に大小字数、中に「通鑑前編幾」の題と丁付、下に刻工名を刻する。明修葉には小黒口も混え、その場合は上下に文字がないが、三画に分け

ることと題は同じ。しかしその大半は四周単辺か双辺で、巻一三、一五、一七、一八にだけある。刻工名は、

3弓日章　弓日華　方景山　4方景明　王清谷　王続卿　7余寿
余宝　呉茂翁　呉翁　李月泉　沈天易　沈天錫　沈名玉
8芦用之　芦堅　10徐寿山　徐寿卿　翁子和　11張文虎　盛元吉
12陳文貴　13葉秀　葉琇　葉埜　葉華甫　詹仲亨　15劉升
潘山秀　潘山琇　潘子華　蔣云　滕吉甫　褚君淑　鄭必清
17応士良　応顕之　22龔日章　龔日華　龔日新　（以上原刻）
王子智　文　（以上補刻）

尾題「通鑑前編巻之十八」、一行を空け八字を低して「門人御史台都事汝南郭坰校正」「門人金華許讓校正」の二行がある。

明修葉は識別しやすいが、とくに巻一八第一葉は線黒口、刻工が王子智であるのに旧京書影312は原刻の龔日新であり、修葉と判る。これら原刻刻工は、天暦の前後の泰定・至順刊本にその名がみえる。

蔵印は「輔生堂」「徐／子宇」（陰）、「婁江／世家」「製書／伝後」「子孫／宝之」、「帰安陸／樹声叔／桐父印」。

旧京書影本は中央図書館（北平蔵）、存四巻。南雍志経籍考に著録されるから、明の南監に版木が伝えられ、存者九八〇面に失者は七面と少いが、中国古籍善本書目には完本はまったく著録を見ない。上記の台北所在本のほかに南京図書館（丁志・盆影）・上海博物館（存四巻）に、明修本が上海・復旦大学・揚州市・山東省（存二巻）の各図書館に蔵される。

**通鑑続編**二四巻　元陳桱撰　元至正二五年（一三六五）
松江顧逖刊（巻四～六補写）　二四冊　静嘉堂文庫蔵
後補淡褐色表紙（二八・九×一七・七チセン）、襯装。

通鑑続編序　至正二一年周伯琦、（序）　同一八年陳基、通鑑続編叙　同二二年張紳、（自序）　同一〇年陳桱　が続き、通鑑続編目録、書例。

「通鑑続編巻第一（隔四格）陳桱」。左右双辺、九行、二一～二二字・注文小字双行。版心　線黒口、単黒魚尾、「通鑑続編　巻幾（丁付）」、稀に下象鼻に刻工名。眉上に干支の紀年、元年は概ね陰刻とするが他は陽刻。巻一九後半の「蒙古太祖皇帝即位」以後、元朝を「大元」と称し、大元、蒙古、太祖皇帝、列祖皇帝、世宗等、語の元朝に渉るものの上は空格とする。刻工名は王叔敬　永之　周祥　徳天、単字は元王永周朱伯亨東徐番潘趙。

巻二四末葉は大きく破損し、本文はすべて補写されているが、

最末上部にわずかに「通鑑続編巻第　／（低二格）是編騰写多訛　／（同）正二十五季夏　」の三行の上部と、明初晋府の「子〻孫〻／永宝用」印の左半とが明らかに残っている（静嘉堂文庫宋元版図録に書影がある）。このうちの尾二行は、故宮本、北平本、中央本のいずれにも欠くが、中央本の一（盧文弨抱経楼旧蔵）に「是編騰写多訛舛越四年始克取元藁校正至／正二十五年夏五月甲子学生楊儔范熙謹書」と墨書されているというちの一部である。これをもって静嘉堂図録の解題の通り、至正二五年刊となる。

北京図書館古籍善本書目は所蔵の四部（一は存二巻、二部は明修）をすべて至正二一年顧逖刻とし、中国訪書志は首の二一年の周伯琦序に「松江弐守昭陽顧君逖思邈甫将鋟梓以広其伝」とあることと、同二二年の張紳の序があることとによって、至正二二年序刊（松江・顧逖思）としている。

蔵印は「敬徳／堂図／書印」「子〻孫〻／永宝用」（明晋荘王朱鐘鉉）、「梅里万／善堂李／氏図書」（李化楠）、「桂堂王氏／季籍図書」、「静志／堂印」、「汪印／士鐘」（陰）「閻源／真賞」、「攜李項氏宝／墨斎図書記」。

**又**　〔明〕修　二四冊　　内閣文庫蔵

後補淡褐色又は淡縹色表紙（二五・三×一五・五ｾﾝﾁ）、襯装、第一〇・一八・二四冊は近年の裏打補修。外題「陳氏通鑑続編幾」、右肩に目録外題として宋の帝号を墨書する。前掲本の四序の後に姜漸の通鑑続編序を加える。通鑑続編目録と書例。

本文は明修葉が八、九割を占めるが、首題をはじめ版式は原刻とほとんど同じ、ただ版心に大小字数を刻さず、下方の線黒口の右に校正者、左に刻者の姓名を記す。すなわち訓導銭如塤・銭紳、教論陳導曽校正、そしてときに刊字匠と冠して王信　王盛　毛達　呂臻　何漢　呉梅　張恩温　徐孟得　徐海　徐進　章敬　陳海　有誠　蘇良等の刻工名がある。

巻六第二三葉、一八―四八、二二―四が欠葉。ごく稀に朱引と朱傍点。巻二四末に尾題はなく、その後に刊語もない（明修葉）。蔵印は「建安楊氏／伝家図書」、「弘文学士院」（陰）「林氏／蔵書」「昌平坂／学問所」（墨）「浅草文庫」「日本／政府／図書」。経籍訪古志巻三著録。

**続資治通鑑長編撮要**　一〇八巻（残本存巻三〇～三四・三八之一～四〇之一・五七之二～七五之二・七九～八八

・九一之二～一〇二之一・一〇五之一～一〇六之二

計五一巻）　宋李燾撰　〔南宋〕刊　三二冊

静嘉堂文庫蔵

後補青色表紙（二六・二×一七センチ）、金鑲玉装（料紙高さ二三センチ）。副紙二葉に無名氏の手識二則があって、存巻次や（異筆も交える）宋史李壽伝の要約などを記す。

本文巻首「続資治通鑑長編撮要巻第三十／（低三格）太宗皇帝紀十四」。左右双辺（一八・八×一二・三センチ）、一三行、二三字・注文小字双行。四周双辺の葉もある。版心は白口が多いが線黒口もあり、上象鼻に大小字数を、双黒魚尾の間に「監幾」の題を刻する。刻工名はない。

巻八一之一第五葉、八五之二―一〇・一五、九五之一―一〇、一〇六之二―一一が欠葉。

尾題は「続資治通鑑長編撮要巻第一百六之二」。これが英宗皇帝巻之二之二であるから、残り二巻余は英宗代の中途か。

避諱欠筆は、玄弦絃鉉　警驚　禎貞偵　曙署　勗　桓完　構購　愼字にあって、惇敦郭郼には及んでいない。字様は整っているものの固く、南宋前期のものとも思えない。同中期の刊か。

蔵印は、「汪士鐘／曾読」「宋本」（楕円）、「呉門」「君謙／私印」、「功甫借観」、「金匱蔡氏酔／経軒攷蔵章」「酔経／主人」（陰）「梁渓／蔡氏」「蔡印／廷楨」「卓／如」（陰）「廷／相」（陰）「伯卿／甫」「宋本」（楕円）、「帰安陸／樹声叔／桐父印」。

同版本は北京図書館にあるだけである。北京本は過半が清の補写で、宋刻の残は四七巻、首の七巻を存するのが貴重であるが、大半の巻は偶然にもこの本と同巻である。

続資治通鑑長編は一〇六三巻あったとされるが、早くその主要事項を要約した撮要が編まれたようである。後掲の続資治通鑑は更に一八巻に圧縮されるが、これは李燾が預ることなく、建安の書肆によるものであろう。なおこの続資治通鑑一八巻は次に掲げるべきであるが、劉時挙撰の後集、宋季三朝政要との合刻の陳氏余慶堂刊本等を一括して扱うために、皇朝編年綱目備要を先に解題する。

**皇朝編年綱目備要**三〇巻　宋陳均撰　〔南宋後期　建〕刊（巻二一～三〇補写）　三〇冊　静嘉堂文庫蔵

後補金切箔散乳白色表紙（二五×一四・八センチ）、金鑲玉装（料紙高さ二二センチ）。

陳均の自序に次で、紹定二年（一二二九）の眞徳秀、鄭性之、

林岱の三序がある。続いて皇朝編年備要参用凡例、皇朝編年綱目備要引用諸書で第一冊。皇朝編年綱目備要目録は二五巻（哲宗元符三年）までで、その後、空一行で「已後五巻見成出售」と刻する。

本文首題は「皇朝編年綱目備要巻第一（隔二格）凡七年／（低六格）壺山陳均編」。単辺（一八・五×一一・七チセン）。帝号、干支と年代、主要事項は二行に跨り（干支は墨囲陰刻）、行一六字。詳細は注の形式で有界一六行、行二四字。版心 線黒口、双黒魚尾、題は「備要幾」、巻八・一五にごく稀に刻工名「茂」。耳格に年号年代。

主に前半に朱筆で句点、傍線、傍点、朱引が、墨筆で目録を主に年代に干支、眉上に注記が書入れられている。

補写の一〇巻は欽宗の末年までを収め、きわめて精緻なものであるが、空字空行の箇所があり、首尾題が巻二一～二五は「皇朝編年　備要巻幾」、巻二六～三〇は「九朝編年備要巻幾」とあるから、伝本を他に聞かないだけに、底本が何であったか疑問である。これらの巻にも汪氏印が捺されている。

宋諱欠筆は、匡 光義 貞 勗 桓 完 慎 惇 敦 の字にあって郭 には及んでいない。巻頭の字様とこの欠画によると南宋中期刊と思われるが、後半の字様はむしろ元刊本に近く、南宋後期に中期刊本を覆刻したとみるべきか。

蔵印は「厳蔚」（陰）「二酉斎蔵書」、「士礼／居」「丕／烈」「堯／夫」、「汪印／士鐘」（陰）「閬源／眞賞」、「帰安陸／樹声 叔／桐父印」（陰）「臣陸／樹声」、「静嘉堂現蔵」。

記事は王朝に関することを中心としていて、さほど詳細にわたるものではないが、天壌間の孤本である。重要文化財。一九三六年、静嘉堂秘笈之一として影印された。

**続資治通鑑**（前集）一八巻　宋李燾撰〔元至大皇慶間〕建安陳氏余慶堂刊（通鑑三種之一）　八冊

静嘉堂文庫蔵

後補淡褐色または黄色表紙（二五・一×一五・六チセン）、大きめの襯紙を挿み、原料紙は高さ二一・九チセン。

乾道四年四月日の李燾の上表、その末葉裏面に大きく「建安陳氏／餘慶堂刊」の木記（外郭一三・五×七・六チセン）。続宋編年資治通鑑目録、太祖から欽宗まで。末に「武夷 主奉 劉 深源 校定」の一行がある。宋朝世系之図と中興世系之図（一葉）。

本文首題「続資治通鑑巻之一／（低六格）朝散郎尚書礼部員外郎

兼国史院編修官李 燾 経進／(低四格)宋太祖一」。双辺（一九×一二・六チセン）、毎半葉一三行、行二二字・注小字双行。版心 小黒口、双黒魚尾、題「宋監（前）幾（丁付）」。稀に字数があるが、刻工名を刻さず、眉上に標注、行三字、耳格はない。尾題「続資治通鑑巻之十八」。

欠目録第三葉。稀に眉上に音注を墨書する。蔵印は「泰／峯」、「帰安陸／樹声蔵／書画記」「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」。

続資治通鑑は前集一八巻、後集一五巻、宋季三朝政要の三部が叢刻とされたものらしく、それがこの陳氏余慶堂、次の朱氏与畊堂、張氏集義書堂の三書肆で印行された。陳氏余慶堂本では宋季三朝政要に皇慶元年（一三一二）の刊記があるから、その前の至大末ごろから前編が刊行されはじめたとみるのが妥当と思われる。

なお北京図書館蔵本のうちの一（前集が書号〇七三、後集が〇七四で合帙）の第一冊の表紙見返に大きく扉書（封面）があり、上段に横に「餘慶書堂」、その下に大字で「宋史全文／資治通鑑」、この両行の中間に上下を花口魚尾に飾られて「李燾経進本」と書かれている。この形式は第三の雲衢張氏刊本（内閣文庫蔵本）に踏襲されている。

**続資治通鑑**（後集）一五巻　宋劉時挙撰　〔元至大皇慶間〕陳氏余慶堂刊（通鑑三種之二）　四冊

静嘉堂文庫蔵

後補黄色表紙（二五・一×一五・七チセン）、襯装（料紙高二一・九チセン）。

続宋中興編年資治通鑑目録、その末に二行に跨って「陳氏餘慶堂刊」、その裏面、尾題の前に大きな唐草文の枠内に次の五行がある。「是編繫年有考拠載事有本末／増入諸儒集議三復校正一新／刊行宋朝中興自高宗至於寧／宗四朝政治之得失国勢之安／危一開巻間瞭然在目矣幸鑒」。

本文首題「続資治通鑑巻之一／(低八格)通直郎国子院編修官劉時挙／(低四格)宋高宗」。巻二から（巻一尾題から）第一行の首題の下方、約四格を抵して「后集」または「后」と墨囲陰刻（稀に陽刻）する。双辺（一八・五×一二・五チセン）。一三行、二二字。版心 小黒口、双黒魚尾、ときに上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。眉上に標注。

「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」印。

南宋の高宗から寧宗の嘉定一七年（一二二四）までを扱う。

理宗以下の約半世紀は次の宋季三朝政要に入り、ここでは蒙古が太祖の時代であって、劉時挙の撰著に元人が追補したことはあるまい。ただし四庫全書総目提要巻四七に「而書末附論一条、称理宗撐柱五十年而後亡、不可謂非幸云云、其言乃出於宋亡以後、似非時挙原文。案旧本目録後有書坊題識一則、称是編繫年有考拠、載事有本末、増入諸儒集議、三復校正、一新刊行云云、則書中所附議論、又元時刊書者所増入、非其旧矣」と。

**宋季三朝政要**六巻　〔元〕不著撰人　元皇慶元年（一三一二）建安陳氏余慶堂刊　（通鑑三種之三）　二冊　静嘉堂文庫蔵

後補黄色表紙（二五・一×一五・七チセン）。

「宋季三朝政要目録」の題が二行に跨り、その次行に「陳氏餘慶堂刊」、空一行で双辺の木記「理宗国史載之過北無復可攷今／将理度両朝聖政及幼主本末纂／集成書以備他日史官之採択云」。目録尾題も二行を取るが、その前に小字ながらやはり二行に跨って「皇慶壬子」と刊年を刻する。

本文首題「宋季三朝政要巻之一／（四格低）理宗」。巻六は首尾題とも「宋季三朝政要附録巻之六」とし、首にはその次に「広王本末　陳仲微録」の一行がある。双辺（一八・二×一二・五チセン）、一三行、二二字。版心線黒口、黒双魚尾、題は「政要幾（丁付）」。眉上に標注はない。

元朝を大元と称するが上を空格とせず、巻五は「大元改臨安府為杭州」で終って尾題となり、巻六の題に附録の二字がつくことになる。

蔵印は「泰／峰」、「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」。

中国にはこの合刻本三種を揃えて所蔵するところはない。陳氏余慶堂本は李燾の前集は北京図書館に二部、劉時挙の後集は北京に三部と上海図書館、台北の中央図書館、宋季三朝政要は上海に二部と遼寧省図書館に蔵される。ただし中央図書館の明修というのは、この本の版木がまもなく朱氏与畊堂に移されるのに、理解しにくい。

**続資治通鑑**一八巻（欠巻一五～一八）　宋李燾撰　〔元至大皇慶間〕建安陳氏余慶堂刊　〔元〕建安朱氏与畊堂修　六冊　静嘉堂文庫蔵

後補淡褐色表紙（二三・一×一四・八チセン）、襯装。

乾道四年四月　日の李燾の上表、その末葉裏面に大きく「建

安朱氏／與畊堂刊」の木記がある。続宋編年資治通鑑目録、第四葉補写、第五葉欠。北京図書館本にはこの末葉の尾題の前に、二行に跨って「武夷主奉劉深源校定」とある。同じく北京本にある宋朝・中興世系之図はない。

本文首題「続資治通鑑巻之一／（低六格）朝散郎礼部員外郎兼国史院編修官李燾 経進」。双辺（一九・二×一二・六チセン）、一三行、二二字。版心 線黒口、双黒魚尾、題「宋監幾フ （丁付）」。眉上に標注。以上は建安陳氏余慶堂のものとまったく変らず、わずかに木記八字中の「陳氏餘慶」を「朱氏與畊」と改めたにすぎない。覆刻ではなく、陳氏余慶堂の版木をそのまま用いたもの、すなわち朱氏が版木をそのまま用いたもの、つまり版木が朱氏与畊堂に移され、刊記を直して印行されたのである。そして両者を較べると漫漶がさほど進んでいないから、陳氏余慶堂の宋季三朝政要からあまり隔たない延祐中（一三一四～二〇）ころの印か。

しかし余慶堂と与畊堂本はまったく同じというわけでなく、眉上の條目標注の一部が後の与畊堂本ではいささか削去されている。たとえば巻一第四葉裏（一一四裏）・一九表・二三表、二（一〇箇所）、一〇—九表裏・一〇表裏、一一裏・一五表裏、一一—一表裏、一二—一一表・一二裏・一九表、一九—二〇表などにそれが行われている。これらを修補とみて、標記に朱氏余畊堂修とした。

次の跋文にもいうように、巻六第三葉が巻一四末に誤綴されている。

巻末に嘉慶一二年高銓（蘋州）の手跋がある。「李文簡 続宋編年通鑑曾於書船中見写本凡／十八巻起建隆訖靖康此為元刊本止十四巻欠十／五十六十七十八共四巻第六巻欠第三頁誤以後集六巻／之第三頁足之文簡長編終于徽欽二宋是書／亦終于徽欽今後集六巻之第三頁乃戴紹興年／事其非李書可知考宋劉時挙亦有続宋編年／資治通鑑十五巻起高宗建炎元年訖寧宗嘉定／十七年以世次合之紀北宋者為李書紀南宋者当／為劉書然残欠不全又無序跋可證深愧見聞寡／陋不能悉此書之本末也／嘉慶丁卯二月蘋洲記「詮」（陰）（印）「文貞」（印）。

蔵印は「呉興包／子蔵書／画金石記」「包虎／臣蔵」「厳蔚」（陰）「苕上／散人」（陰）、「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」。

北京図書館に二部、南京図書館（盍山書影）に同版本があるが、劉時挙の後集一五巻と宋季三朝政要六巻はまったく現存しない。

**続資治通鑑**（前集）一八巻　宋李燾撰　〔元至治中〕雲衢張氏集義書堂刊　五冊　内閣文庫蔵

後補淡褐色表紙（二六・一×一六・一センチ）、外題「続宋編年資治通鑑一之四」。見返いっぱいに扉書があり（外郭二〇・四×一二・八センチ）、上段に「集義書堂」と横書、その下に「宋朝長編／資治通鑑」と大書し、両行の中間に「李燾経進本」（上下に花口魚尾）と刻す。

宋朝世系之図と中興世系之図（一葉）、乾道四年四月　日の李燾の上表、続宋編年資治通鑑目録。その末葉の表の版心寄りに「雲衢張氏」、裏に「鼎新栞行」の木記があり、その末行に目録の尾題。

本文首題は「続資治通鑑巻之一（隔七格）前集（墨囲陰刻）／（低六格）朝散郎尚書礼部員外郎兼国史院編修官李　燾　経進」。双辺（二〇・一×一三・一センチ）。一五行二四字。版心　小黒口、双黒魚尾、「宋監前幾　（丁付）」と題する。眉上に標注があり、行二字。紀年干支を墨囲陰刻。「曽鞏政要曰」等の引用やそのほかの注に当る文は低一格。欠巻一〇第一葉。

蔵印は「弘文学士院」（陰）「林氏伝家図書」「林氏／蔵書」「昌平坂／学問所」（墨）「浅草文庫」「日本／政府／図書」。

これも陳氏余慶堂本と同じく次の続資治通鑑後集、宋季三朝政要とおそらく合刻されたものであろう。宋季三朝政要が至治三年（一三二三）刊であるから、これも至治中の刊と思われる。版式は異るが、余慶堂本を翻刻したことに疑いの余地がない。

**続資治通鑑**（後集）一五巻　宋劉時挙撰　〔元至治中〕雲衢張氏集義書堂刊　二冊　内閣文庫蔵

後補褐淡色表紙（二六・一×一六・二センチ）、外題「続宋中興編年資治通鑑　一之五」、「昌平坂学問所」墨印。見返（封面）に大きく（外郭一九・六×一一・六センチ）、上段に横に「集義書堂」、その下に大字で「続宋中興／資治通鑑」の扉書がある（外郭一九・六×一一・六センチ）。続宋中興編年資治通鑑目録。

本文首題「続資治通鑑巻之一（隔七格）後集（墨囲陰刻）／（低八格）通直郎国史院編修官劉　時挙」。双辺（二〇・三×一三・二センチ）、一五行二四字、版心小黒口、双黒魚尾、題「宋監后幾（丁付）」。眉上に標注。尾題「続資治通鑑巻之十五（隔七格）后集（墨囲陰刻）」。

欠巻八第五葉。

蔵印「弘文学士院」（陰）「林氏／蔵書」「昌平坂／学問所」（墨）「浅草文庫」「日本／政府／図書」。

**宋季三朝政要**六巻　〔元〕不著撰人　元至治三年（一三二三）雲衢張氏集義書堂刊　一冊　内閣文庫蔵

後補淡褐色表紙（二六・二×一六・三チセン）、外題「宋季三朝政要全」、右方に目録外題。見返（封面）に次のように扉書する。上段に行二字ずつで「雲衢／張氏／鼎新／綉梓」、その下に「宋季三／朝政要」と大書（外郭二二・一×一三・八チセン）。以上三書ともむろん元刻元印で、表紙は江戸後半期のものであるから、改装時にうまく貼り合わせたらしい。

宋季三朝政要目録、目録の首題の次行に「理宗国史載之過北無復可攷今／将理度両朝聖政及幼主本末纂／集成書以備它日史官之採択云」の三行があるのは陳氏余慶堂本と同じ。同尾題の前行に「至治癸亥／張氏新刊」の双辺木記。

本文首題「宋季三朝政要巻之一／（低四格）理宗」、双辺（二〇・八×一三・二チセン）、一五行、二四字。版心　小黒口、題「政要幾フ　（丁付）」。巻六を附録とするのも同じであるが、陳仲微録の四字はない。すなわち尾題「宋季三朝政要巻之五」に対して、首尾題「宋季三朝政要附録巻之六」。

「林氏／蔵書」「林氏伝家図書」「昌平坂／学問所」（墨）「浅草文庫」「日本／政府／図書」印。

以上三書とも経籍訪古志巻三著録。

雲衢は建安の小さな地名かと思われるが、この張氏集義書堂本は北京図書館に一部ずつ存するものの、封面の扉書が存しない。他に故宮観海堂と青島市博物館に李燾の前集の残本とこの宋季三朝政要があるだけで、封面を備えるこの三点セットは貴重である。

**又**　一冊　静嘉堂文庫蔵

第三の宋季三朝政要だけ存。後補淡褐色（浮彫文　文様不明）（二五・九×一六チセン）、裏打補修。

全巻に朱句点、朱引、欄外上下に朱墨で標注音釈等の書入がある。蔵印は「懐松／盧記」、小型墨印の「布治波良乃毛等袁／宇多岐尓乎佐牟留／布美良乃之留思　」印。

**増入名儒講義続資治通鑑宋季朝事実**　元不著撰人　〔明初〕覆元建刊本　一冊　天理大学附属天理図書館蔵

後補茶色表紙（二五・八×一五・三チセン）、右隅に「秘笈　桐西書屋珍蔵宋本」と墨書。襯装。

本文巻首「増入名儒講義続資治通鑑宋季朝事実／（低四格）度

宗」。左右双辺（一九・八×一三センチ）、一六行、二五字。講義は界幅がやや狭く、半葉一九～二〇行に相当するか、毎行の字数は同じ。

紀年干支を墨囲陰刻して記事があり、改行して低一格の墨囲陰刻の「講義曰」にその文が続く。前者が広く一六行、後者がやや細行となる。

版心　細黒口、双黒魚尾、題は「宋幾」「宋監幾」、ときに眉上に見出しの注、そして耳題を刻する。

巻末に識語三則がある。「季朝事実宋度宗時事最詳可補正史／所未備槧本特尠此宋刻也更為可宝／甲寅小春謹識」。別筆で「後序有大元云々其為元初刊本／無疑也癸未六月笏厲閲謹識志高印信（印）」。「壬申三月六日　日葊又閲一過／春寒頗厲白盦（印）」。蔵印が「愚斎／図書／館蔵」「愚斎／審定／善本」、「江建／霞秘／医印」「唐氏悳彰蔵書」等。

宋史全文続資治通鑑三六巻宋季朝事実二巻のうちの宋季朝事実の首一冊で、元刊本が中央図書館（有欠、中国訪書志著録）、北京図書館（有欠）等にあり、その明代に入ってからの覆刻本である。旧京書影（323）にこの首葉の元刊本の書影があり、その覆刻であること、字様が劣り明代に降ることがわかる。両館の善本書目に明刊黒口本がそれぞれ一部（欠宋季朝事実）と三部を著録するが、これらが同版本か。旧京書影（314）～（319）（324）が同版のようであるが、いずれも宋史全文続資治通鑑の部分であり、しかも現存しない。

## 記事本末類

**通鑑紀事本末四二巻**　（存巻一・三～五・一一～一九～二七・三一～四二計二九巻）　宋袁枢撰　宋淳熙二年（一一七五）厳州郡学刊　宋端平一年（一二三四）・淳祐六年（一二四六）遞修本と至　宋末元初遞修本との寄せ本（巻三八～四〇補写）　五一冊　静嘉堂文庫蔵

後補金切箔散縹色絹表紙（二六・七×一八・八センチ）、襯装。首の淳祐丙午（六年）の章大醇の修序に「是書刊淳熙乙未（二年）修于端平甲午（一年）重修于淳祐丙午」といい、序末に「待省進士州学直学兼釣台書院講書胡　自得掌工／承直郎差充厳州州学教授章　士元董局」の二行がある。次に通鑑紀事本末総目。

本文巻首題「通鑑紀事本末巻第一」。左右双辺（二〇・二×一五センチ）、一三行、二四字・注文小字双行。版心　白口、双魚尾、「通鑑第一」のように題し、下象鼻に丁付と刻工名、そし

て原刻は下象鼻の両者の中間にしばしば大小字数を刻する。補刻の多くは字数が上象鼻にある。

避諱欠筆は 玄弦眩縣懸朗 敬警驚 弘泓殷慇溲 匡恇胤 頴 恒禎貞偵徵懲 暑樹戌豎 讓 勗桓峘絙完 搆構媾溝購 慎 等字、補刻葉のごく一部の 敦 字に行われ、桓を「亘」に、構をしばしば「太上御名」に、眷を「御名」に作っている。太上御名は原・補刻葉の双方にある。

刻工については、やや長くなるから後に述べる。

蔵印はA龍文円印、「英江徐／氏記事」（大小二種）、B「柏山張／氏省軒／恒甫印」「豫園／主人」、C「汪士鐘蔵」（陰）。A類は巻一・三～五・一四・二〇・二一・二五・二六・三二・三五・三六に、B類は巻一一～一三・二二・二三・三一・三三・三四・三七・四一・四二に、Cは補写巻を含めた全巻に捺されている。A類には朱筆句点、墨筆の見出注記が施され、第一冊の序末と各巻末に「印書盛新」の墨小印がある。B類の紙質はやや粗く、ごく少いが別筆の朱句点が打たれている。汪士鐘のもとかその以前に、AB両本が取合わされ、五巻に補写が行われたことを示す。

なお、この本が存二九巻で五一冊に及ぶのは、ほぼ一巻を二冊に分っているからであるが、そのために前後半のいずれかを欠く場合があり、九冊の補写巻にもそれがある。以下にこれらの状況を表示する。下段は全葉存の巻である。

| 巻 | | | | 巻 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | A | 存一～二九葉 | 後半欠 | 三 | A | 二冊 |
| 四 | A | 存三三葉以後 | 前半欠 | 一一 | B | 二冊 |
| 五 | A | 存三六葉以後 | 前半欠 | 一二 | B | 二冊 |
| 一九 | 補写 | 存三八葉以後 | 前半欠 | 一三 | B | 二冊 |
| 二〇 | A | 二冊 | 第九・四一葉補写 | 二二 | B | 二冊 |
| 二一 | A | 二冊 | 第五二葉補写 | 二三 | B | 二冊 |
| 二四 | 補写 | 二冊 | | | | |
| 二六 | A | 二冊 | 第二一葉補写 | 二五 | A | 二冊 |
| 二七 | A | 存一～三七葉 | 後半欠 | 三二 | A | 二冊 |
| 三一 | B | 存四三葉以後 | 前半欠 | 三三 | B | 二冊 |
| 三八 | 補写 | 二冊 | | 三四 | B | 二冊 |
| 三九 | 補写 | 三冊 | | 三五 | A | 二冊 |
| 四〇 | 補写 | 二冊 | | 三六 | A | 二冊 |
| 四二 | B | 存一～四二葉 第一三葉補写 | 後半欠 | 三七 | B | 二冊 |
| | | | | 四一 | B | 二冊 |

さて刻工名である。

4方忠　方昇　方茂　方通　方淳　王永　王信　王華　5史鼎
6江漢　7余元　余昌　呉中　呉仲　宋圭　宋昌　宋琳　8金彦
10徐彦　翁祐　翁楊　11陳全　陳宗　陳通　陳震　13楊永　楊昌
楊暹　15蔣信　17蕭詔　20厳明　（以上原刻）
3万申　4方文虎　方先　方昇　方堅　毛元亨　毛杞
毛森　6同士元　朱明　江大亨　江部　江淮　江楫
江栄　7余斌　呉中　呉琮　8季大　9范石　10徐仁
翁晋　翁真　翁寧　11陳全　12童泳　13葉松
15劉士永　蔡方　蔣松　20芦洪　蘆適　（以上補刻）

方昇、呉中、陳全が原補刻の双方にいる。方昇は明らかに双方にみえるが、両者には半世紀以上の差があるから、同名異人と考えるべきか。呉中、陳全は印面の状況から原刻とみたものもあるが、その例は少く、あるいはともに補刻刻工かもしれない。

一方、端平と淳祐の両次の補刻の間は一二年あるが、印面からその区別はほとんどつかず、江部が章大醇の修序を彫っているから、淳祐の刻工とわかるだけである。この修葉を規準に印面を見ると、A本の補刻はほぼこの期のものかと思われる。

だいたいA本は原刻葉の漫漶がかなり進んでいて、それが各巻とも約七、八割を占める。そしてその原刻葉に、版面の上下方などを部分的に補修した場合や、また一行のなかの一～五字を入木したらしい場合がある。後者はその文字が周囲と異って摩滅していないもの、やや細く小さく、あちこちに点在するものである。これらは臆測になるが、あるいは端平の第一次の修であろうか。

B本は原刻葉がぐっと減って、少い巻では一、二割程度、平均して三、四割になっている。補刻葉の刷りは概して新しく、字様が原刻葉に近い優れたものも少くないが、かなり拙劣なものもある。B本にしても、端平淳祐の修補はA本と同様のはずであるから、修葉が過半にも達しているのは、さらに少くともう一次の修が行われたのである。しかし修葉の字面はほぼ一様でいて、A本と同じ刻工は問題がないが、存巻次が異るとはいえ、A本にまったくみえない名が多く出てくるのが修期の判定を惑わせる。ただ字様の劣るのはさらに後修で、淳祐の後といえば宋末元初となり、刻工はほとんど単字であるが、前表のなかでは方文虎、劉士永がこれに属するであろう。

これらの刻工を他の諸書の刻工と較べると、実に六〇もの本に同じ名がある。それらの刊年はほぼ南宋の初期から中期いっ

ばいにわたり、章大醇のいう淳熙二年（一一七五）から前後各四〇年ほどにも拡がっている。その両極の初期のごく初、中期の末の刊本にはそれぞれ一、二名が散見するだけで、淳熙二年にもっとも老または若であった刻工にしても、活動年限として無理があり、同名異人とみられる。そこで紹興末から慶元までの一二世紀後半の刊本に絞り、二名以上が一致するものは次の通りである。

下方の刻工名の右肩の△印は通鑑紀事本末の原刻と補刻の双方にある者、×印は補刻刻工である。

| 書名 | 刊年 | 刊者 | 刻工名 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 臨川先生文集 | 紹興二一 | 序刊両浙西路転運司 | 方通 | 金彦 | |
| 外台秘要方 | 南宋初期 | 両浙東路茶塩司 | 徐彦 | 朱明× | |
| 史記 | 南宋初期（覆宋景祐刊本） | | 王華 | 陳全△ | |
| 史記 | 南宋前期 | 両淮江東転運司 | 王永 | 陳震 | 朱明× |
| 漢書 | 同 | | 王永 | 方堅× | |
| 後漢書 | 同 | | 王永 | 陳震 | 朱明× |
| 聖宋文選 | 南宋前期 | 浙 | 楊昌 | 方堅× | |
| 東坡集 | 南宋前期 | | 宋圭 | 宋昌 | 朱明 |
| 周易注疏 | 南宋前期 | 両浙東路茶塩司 | 呉中△ | 方堅× | 朱明× |
| 尚書正義 | 同 | 王信 | 呉中△ | 方堅× | 朱明× |
| 礼記正義 | 紹熙三 | 同 王信 | 蔣信 | 呉中△ | 方堅× |
| 宋書 | 南宋前期浙刊 南宋中期修 | | 王信 | 呉仲 | 楊昌 |
| 南斉書 | 同 | | | | 王信 |
| 梁書 | 同 | | | | 呉中△ |
| 陳書 | 同 | | 王信 | 王華 | 宋昌 |
| 魏書 | 同 | 王信 | 王華 | 呉中△ | 方堅× |
| 北斉書 | 同 | | 王信 | 王華 | 方堅× |
| 南軒先生文集 | 慶元 | 嘉泰間厳州 | 方忠 | 方淳 | 方茂 |
| 皇朝文鑑 | 嘉泰四 | 新安郡斎 | 王信 | 江漢 | 楊昌 |

徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁× 徐仁×

この南宋（初）前期刊本はすべて両浙路、淮南両路など杭州周辺の官刻本であり、淮南両路の三史までは紹興中（初期）の刊と思われる。淳熙二年まで二〇ないし一五年の差があり、字様もやや異るが、これだけの一致は無視できない。なにより淳熙、紹熙間刊の越刊八行本注疏と、南宋前期杭州刊七史（いわゆる眉山七史）のこのころの修とに合う。そして南軒先生文集は本書との関係もあって厳州刊と推定されるのであるが、これと同名がが四人おり、さらに同じ皇朝文鑑（嘉泰四年・一一九三刊）の新安が婺州金華の別名であれば、ともにもっとも密接な関係にあることになる。これらをみれば、本版が淳熙二年刊

であることは疑いのないところである。

ただし、印面から端平淳祐の修葉とみた方堅、朱明、徐仁らがしばしばこの表の中に現れるが、これも一考を要する。しかし、かれら以外の者は他の諸書、とりわけ端平淳祐という後期の刊本にまったくない。宋末元初とみられる刻工についても同様である。

巻一九第三八～七四葉・二四―一～七七・巻三八～巻四〇は補写。巻一第三〇葉以下・四―一～三二・五～一～三五・一九―一～三七・二七―三八以下・三一―一～四二・四二―四三以下が欠葉。

同版本は台北の中央図書館、北京図書館、上海図書館に二部存し、中国古籍善本書目は更に各所の残本六部を著録する。中央本は旧北平蔵で欠七巻三五冊、補刻は元初に至り、方文虎、劉士永という刻工の名もみえる。旧京書影331・332、中国訪書志著録。上海本の一は存一巻。

北京本の一は四二巻四二冊、顧廣圻、石韞玉、宗舜年跋とあるから、蔵園群書題記、蔵園群書経眼録著録本で、宋淳熙二年厳州郡庠刻本とあり、修があるとはいわない。題記によっても、この本は「七百五十九年前之古刻、二千八百九十余葉」（淳熙二年～民国二三年、一巻約六九葉）と全巻が原刻のようであって、章大醇の修序は補鈔である。ただこの本にも「印書盛新」印があるといい、この印はA本のその修序の葉にも捺されていたから、いささか不審であるが、あるいはこれが端平修の直前の印、A本が淳祐修の直後の印で、両者の印行の時期がかなり近接していたものか。

また北京本には首に淳熙元年の楊万里序、後に同二年の朱熹と呂祖謙の序があるとされる。いまこの内容を知りえないが、玉海藝文によれば、淳熙元年に厳州州学教授となった樞方が本書を開版し、たまたま知漳州として赴任する途中の楊万里が序を書いたものであるという。

なお、文禄堂訪書記著録本は、刻工名からみて修補本と思われるが、楊、朱、呂の三序の後に魏楫の序があり、その序末に、進士王俊等八人銜名四行、舒文韶等四人銜名二行、巻末に宣議郎権通判厳州軍州主管学事張杼一行、奏議郎権発遣厳州軍州主管学事魏楫一行があるとされる。また「豫園主人」印を捺すといい、同文の印はこのB本にもあるが、他の印がたがいに異る。

テクストとしての良否については、中国訪書志の解説するところである。

**同**　宋宝祐五年（一二五七）湖州趙与篡刊　元延祐六・明弘治一二・嘉靖四二年遞修　八〇冊

静嘉堂文庫蔵

後補香色表紙（三〇×二三チセン）、一部襯装。

淳熙元年三月楊万里叙、宝祐丁巳趙与篡序、通鑑紀事本末総目（第九～一一葉補写）。

本文首題「通鑑紀事本末巻第一／（低二格）三家分晋」。左右双辺（二三・九×一八・七チセン）、一一行、一九字。版心　白口、単黒魚尾、ときに上象鼻に大小字数、題「通鑑紀事本末巻幾　（丁付）」、刻工名。

欠画は、玄弦鉉 朗 敬 弘泓殷 匡恇 炅 恒 貞 偵 楨 徵 署 樹 竪 讓 驤 頊 勗 煦 恒 垣 完 瑗 構 媾 愼 敦 廓 等の字に行われている。宗室の趙氏の刊刻の故か、避諱がこの期のものとしては珍しく厳格である。それとともに、字様も雄渾であり、良質の板木を用いたのか、原刻葉の残存がかなり多く、それらが漫漶もさほど進んでいない。

台北の中央図書館蔵の至明嘉靖修本の首に元延祐六年（一三一九）の序があり、この年に嘉興学宮が袁枢の孫の明安から版木を購得して修補印行したという。またこの本の明修葉の上象鼻には補刊年記があったらしく、しばしば剜去された跡があり、わずかに「弘治十二（一四九九）年」（巻三一―八二）、「嘉靖癸亥（四二年・一五六三）刊」（巻四二―一二三）の二葉が残される。明代の補刻は字様から見るともう一、二回は行われたようで、版木が南京国子監に伝えられて、補修、印行が重ねられたことを物語る。

しかし補刻刻工を各期に分けることは、補刊年記のある劉潤を除いて明確にできない。左に刻工名を表示するが、補刻刻工は一括せざるをえなかった。

2卜仲　3中明　4方得時　王春　王珪　王興　王興崇
王燁　5史祖　6仲実　7何文　何文成　何祖　何豫
余和　余甫　呉炎　沈杞　沈宗　沈昌祖　沈祖
8周松　周崇　季升　林茂　林嘉　材嘉茂　金永
9范刁　范仲　范仲実　10徐元　徐侁　徐侃　徐松
徐洪　徐珙　徐嵩　徐楠　翁期　茹鎮　茹宝
馬良　11張成　張英　張栄　曹戩　章求　章泳
陳必達　12婺徐　黄佑　13虞桐　虞源　賈茂　賈端

14熊杲　15劉共　劉孚　劉拱　劉隱　劉霽　蔡文
蔡成　蔡虎　蔡茂　16銭玎　銭瑛　17濮冲　濮仲実
鍾季升　21顧祺　（以上原刻）
2丁璧　2中成　4仁端　史京　5伍琇　6朱銘　7何愷
均佐　汪鐶　8周春孫　10徐元　11得春　梁仁甫　陳添孫
陸位　12彬崇得　13楊東浙　董継恩　15劉潤（弘治一二年）
19羅嗣秀　（以上補刻）

補写葉が少くない。

台湾所在本は残本も含めて九部が中国訪書志に著録され、大陸現存本は中国古籍善本書目によるとやはり残本を含めて四〇部を数える。

又　〔元明〕遞修　八四冊

大倉文化財団（大倉集古館）蔵

後補金切箔散薄黄土色表紙（三一・六×二三・八チセン）、襯装。

版心上象鼻の補刊年記はやはりすべて剜去されているが、明の嘉靖末ごろの字様の葉が少からずあるから、静嘉堂本と同じ修刻であろう。

所々に朱墨両筆の校字校語の付箋がある。

蔵印は、「汲古／閣印」「毛氏／珍蔵」、「陳印／帝祖」（陰）、「玉／方」、「胡薊門蔵書記」「横雲／山民」（橋円）（胡遠）、「宋本」（橋円）「秘笈」（橋円）、「菉斐軒／蔵書記」（許縵）、「巴陵方氏／碧琳瑯館／珍蔵秘笈」「巴陵方氏碧琳／瑯館珍蔵古／善本之印」（陰）「方印／功恵」（陰）「柳／橋」、「張之洞審／定旧槧精／鈔書籍記」「万物／過眼即／為我有」「壺公」（陰）「無競／居士」（陰）「仲申／眼福」、「大倉文化／財団／蔵書」。

又　存巻三一　〔明初〕印　一冊　斯道文庫蔵

新補紺色表紙（三四・七×二二・六チセン）、粘葉装。全一二四葉。この巻には補刻と思われる葉がわずかに一あり、刷りの具合や紙質からみて元末明初ごろの印と思われる。

又　巻五零巻（存第五五～一〇三葉、ただし欠第六九葉）　附巻次不明零半葉　一冊　京都大学文学部蔵

新補青色表紙（三二・一×二二・二チセン）。修葉はなかろう。

十硯斎文庫本。

## 別史類

**汲冢周書**一〇巻　晋孔晁注　元至正一四年（一三五四）
嘉興路儒学刊〔明〕修　四冊　静嘉堂文庫蔵

後補黄色表紙（二七・八×一七・五ㄘㄣ）、襯装。
首に汲冢周書敍　元至正甲午（一四年）黄珍、文中に「…郡太守劉行廷幹好古尤至出先世所蔵命刻板学宮俾行于世」とある。
「汲冢同書／周書巻第一（隔八格）晋孔晁注」。次行以下にそれぞれの巻の目録を二段に刻する。
左右双辺（二二・五×一四・五ㄘㄣ）、一〇行、二〇字・注文小字双行。版心　線黒口、ときに白口、双黒魚尾。その中間に「周書一　（丁付）」の題、上下に大小字数と稀に刻工名。刻工は沈成　沈成甫　周継宗、単字で　匋平陁陳。
「周書巻第十終」の尾題の次葉に、宋嘉定十五年の丁黼の後序が補写されてある。
巻中にもときに補写葉がある。わずかに明初修葉を含むか。
蔵書印は「王昶／之印」（陰）「述／庵」、「曽在上海／郁泰峰家」、「臣陸／樹声」（陰）「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰）。
現存本は意外に少く、他に台北の故宮博物院と中央図書館、そして北京図書館と上海図書館に各一部があるにすぎない。

**古史**六〇巻　宋蘇轍撰　〔南宋中期　浙〕刊〔元〕・明正徳一一年遞修　一四冊　京都大学文学部蔵

新補濃紫色表紙（三〇・八×一九・九ㄘㄣ）、襯装。
蘇轍の古史叙、目録（欠首二葉）。
本文巻首「三皇本紀第一（隔四格）古史一」。四周単辺（二三・七×一五・八ㄘㄣ）、一一行、二三～二四字・注文小字双行二二～二五字。版心白口、双黒魚尾、「古史本紀（世家・列伝）幾」のように題し、上象鼻に大小字数、下象鼻に下付と刻工名を刻する。丁付には叙を天として千字文号を打ち、目録と本紀七巻（全八三葉）、世家九巻（一一八葉）、列伝巻一～九（九八葉）、同巻一五～二五（九二葉）は数字を通し、巻一〇～一四・二六以下は各巻ごとに数える。欠画は　玄弦眩　敬警驚　弘殷　匡　恒　貞徵　讓　樹　頊勗　桓完　構購媾　愼　字にある。刻工は南宋中期の原刻と元代の第一次修に次の者がいる。

2丁之才　丁松年　4方中　方至　方信　毛端　毛政
王汝林　王定　王明　王政　王恭　王進　王渙
王寿　5石昌　6朱玩　朱祖　7何澄　何沢　余政

呉中　呉志　呉春　呉祐　呂信　宋通　宋琚
李仲　求祐　沈丁　沈志　沈定　沈宗　沈忠
沈珍　沈茂　8果張昇　金崇　金祖　金栄　10凌宗
孫日新　孫春　徐珙　徐義　馬松　馬祖　11張升
張亨　張昇　曹鼎　章忠　陳仲　陳伸　陳良
陳晃　陳浩　陳彬　陳遇　陳寿　陳潤　12雇永
項仁　13楊栄　楊潤　董遇　董澄　詹世栄　15劉昭
蔡邠　蔣容　蔣栄　鄭春　16銭宗　19龐汝升　龐知柔
21顧永　顧達　顧澄　（以上原刻）
10袁官　11許宗后　許宗厚　陳徳　15劉升　（以上元補刻）

原刻刻工の多くは、紹熙三年（一一九二）跋刊の八行本の礼記正義、乾道淳熙間刊の同じく尚書正義、慶元六年（一二〇〇）刊春秋左伝正義、嘉定三年（一二一〇）刊の中興館閣録、同五年跋刊の歴代故事と欧公本末、同一二年刊の渭南文集などの刻工と共通する。すなわち南宋中期の江浙地方の工人である。七史や通典をはじめ多数の補刻も手がけている。

巻一七（世家一〇）第二八葉の上象鼻に「正徳十一年」の補刊記がある。

補写葉が少からずある。丁付が数巻を通していて表記しにくいが、約三〇葉に及ぶ。

尾題「滑稽列伝第三十七」。巻末に「紹聖二年三月二十五日眉山蘇轍子由志」一葉が補写されている。

蔵印は傅増湘のものが二、三種ずつ組合されている。「呉中陸／義字儼／著号爽／泉所蔵」（陰）、「陸沆／之印」（右半陰）「靖／伯氏」「陸併字／彭蘭」、「平原／敬印」、「傅増湘／読書」「雙鑑／楼主／人（陰）「雙鑑楼」「萊娯／室」「傅沆叔／蔵書記」「沆叔蔵宋本」「増湘／私印」（陰）「増湘／私印」（陰）「雙鑑楼／収蔵宋本」「蔵／園」沆叔／審定」「蔵園／居士」「長春／室主人」「傅印／増湘」（陰）「沆／叔」「沆叔」「龍龕／精舎」「傅／増湘」（陰）等。これらの諸印から、一九三〇年の文求堂善本書目所載本であることがわかる。

同版本は北京図書館（三部）、台北の故宮博物院にあり、中国古籍善本書目には旅大市、湖南省両図書館の所蔵とも著録されている。

**通志**二〇〇巻（欠巻五八・五九・九三）宋鄭樵撰　至大二年（一三〇九）三山郡学刊　元至治二年福州郡学・明（成化一〇年・万暦一七年等）遞修　一一八冊

内閣文庫蔵

後補灰褐色表紙（三三・五×二三・七センチ）、外題「通志幾」、右上半に小題を墨書。

至治二年（一三二二）三山郡斎における呉繹の序があるが、それに次ぐ至治元年呉繹疏と至治二年九月印造の列銜とを欠き（尊経閣文庫本を参照）、鄭樵の通志総序（初葉補写）と通志総目録が続く。

「三皇紀第一（隔八格）通志一」。左右双辺（二九×一九・四センチ）、九行、行二一字・注文小字双行。版心白口、「通志三皇紀第一　（丁付）」のように題し、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名を刻する。明修葉は主に成化の版が粗黒口、万暦版が白口で、ときに上象鼻に「成化十年／吏部重刊」（陰）「万暦十七年刊」の補刊年記が入る。なお刻工名に「至大二年」「至大二年福建」「至大己酉」の文字を冠する場合がある。ただし至大二年は至治二年より一三年早い。元の原刻葉にはかなり磨滅したものもあるが、補版は比較的少い。原刻刻工を次に掲げる。

2丁克仁　丁克荘　丁君美　丁容　丁荘　丁鎮道　4王一　王乙　王二　王二甫　王十二　王大手　王仁甫　王合　王君粹　王初　王英　王英玉　王素老　王智夫　王台　王福　5史経　付四　付安定　付定　付宗　付長　付員　付崇　6危子　危祖　危梓　朱一　朱乙　朱銓孫　江二　江三　江子堅　江士堅　江六　江六甫　江太　江元三　江弐　江成　江住　江伯寿　江泰　江崇　江衍　江復亨　江善　江意　江福　羊昂　7伯太　伯奴　伯玉　伯先　何鳴皐　呂文振　呂弗　余二介　余子真　余伏亨　余復亨　余陳　余徳閏　余寿　呉子尤　呉友山　呉方午　呉正　呉正乙　呉君圭　呉君宝　呉叔高　呉季子　呉章　呉欽　呉徳　呉徳中　呉宝　呂二　呂公慈　呂文正　呂文振　呂仏　呂慈　宋一　李嬭奴　阮付才　8官子忠　官忠　官春　官椿　9兪平十　兪丙子　姚達　姚欒　姚鶩　施八　施公賜　施午　施文意　施明甫　施意　施徳甫　胡生　胡生子　范子需　范子琇　范壬九　范升高　范四　范仲美　范禾甫　范和甫　范秀　范明　范和甫　10范雪　徐子明　徐明　徐徳潤　翁留　連子青　連子美　連君礼　連竜　高青甫　高得明　高徳明　馬昌　崔一官　11崔一良　崔一観　崔乙観　張林　張叔彝　張奉　張明　張明甫　張彦　張陳甫　梁太初　章進宝　陳丁六　陳十　陳十才　陳士安　陳子禾　陳子和

陳六　陳介夫　陳太　陳文卿　陳五乙　陳必遇　陳仲山
陳君仲　陳和　陳和孫　陳若虚　陳祐甫　陳恵　陳祥恵
陳祥卿　陳順　陳順甫　陳照　陳実父　陸全　竟官
竟萑　12傅子　曾崇甫　游二　游四　童世六　童世禄
童蒙　馮昌　黄五　黄午　黄必大　黄崇　黄章
黄善　黄善楽　黄順　黄寿　黄福　黄徳　黄徳明
黄旺　黄応五　13葉元起　葉世禄　葉岳仲　葉辛一　葉辛乙
葉辛六　葉崇　葉崇甫　葛秀甫　虞乙　虞君恵　虞晋
虞恵　詹仲輝　詹復亨　詹陳福　虞福　詹輝　14熊巳
熊興甫　15劉九　劉子全　劉子周　劉仁仲　劉元叟　劉四九
劉正卿　劉伯達　劉季夫　劉炤　劉記　劉照　潘矮
潘矯　蔡公許　蔡君甫　蔡牧　蔡勝　16盧岩　盧晋
盧福(芦福・炉福)　盧陳福　頼元甫　鮑陳　17応子通　謝友直
謝友誼　謝英生　18魏子敬　魏平叔　魏徳夫　20厳子敏

蔵印は「北海孫／氏万巻／楼図書」(清孫承沢)、「佐伯侯毛利／高標字培松／蔵書画之印」、「昌平坂／学問所」(墨)「浅草文庫」「日本／政府／図書」。

欠葉　巻八五第七九葉、九四―五三、一一五―五九、一三八―三二、補写葉　巻二九第二・一五葉、四〇―三二、六四―一三、六七―五一・五七、六八―三三・三四、七一―二三・二四。

この通志は中国訪書志に指摘の通り(二七〇頁)、呉序、呉疏、版心の刊刻年等によって至大二年に刊行され、至治二年の印造年記は呉繹が江北諸郡に提供するために五〇部を印行したときのものである。善本書室蔵書志や適園蔵書志に、大徳年間(至大の前)に福州に刊刻の命が下ったことが、元の劉壎の隠居通議にあることもいう。

その後、明の南雍志経籍考に版木一三七二四面が存在したことが記されているように、明代に初期から遞修され、それが万暦四七年に至るまで繰返されたから、この本は大部であるが、現存本は非常に多い。わが国にも以下に著録するように七部あり、中国訪書志に台北の七部が著録され、ハーヴァード大学燕京研究所にも二部が存する。以上にもむろん残本、零本も少くはないが、北京図書館古籍善本書目には一〇部を著録し、中国古籍善本書目にはそれを含めて実に四六を数える。

又　至明万暦二四年遞修　三〇〇冊　大倉文化財団蔵

香色表紙(三三×二三・八ｾﾝﾁ)、襯装、一部裏打。

至治二年呉繹序、同元年呉繹通志疏、末に「至治二年九月印造」の七名の列銜（後掲本のところに録）、鄭樵通志総序、通志総目録、そして本文。

欠葉や補写葉があるが、巻二〇〇後半の一冊（末冊・四一葉）は、版心の「通志四夷北狄下伝」の題も薄青色で印刷した罫紙に書写されている。

「宛平王／氏家蔵」（陰）「竪／慕斎／家」（円）（王熙）の両印。

又　至万暦四五年遞修　一二〇冊　宮内庁書陵部蔵

香色表紙（三六・八×二四・三センチ）、外題「鄭樵通志　幾」、一部裏打補修。

至治二年呉繹序、同元年呉繹通志疏、その裏面に至治二年印造の一行と七名の列銜、鄭樵の通志総序、通志総目録があって本文。

版心の破損している葉が少くなく、補刊年記は万暦四十五年が下限かととれるが、漫漶はかなり進み、一連の同版本の中では後印のようである。刻工名も残るものは少く、あっても不鮮明である。ただ巻一首葉が万暦一七年の修で、同年修葉を含む静嘉堂の第一本や、万暦四五年修葉さえある尊経閣本の首葉が元代の刻葉であったのが解せない。

補写葉、欠葉が少くからずある。

蔵印は「徳藩／蔵書」「明治二十九年改済／徳山（横書）一毛利家蔵書／第番一共　冊」、「図書／寮印」。

又　至万暦四五年遞修　一五三冊　尊経閣文庫蔵

後補淡褐色表紙（三三・五×二三・三センチ）、一部裏打補修。

至治二年の呉繹の序は補写であるが、続く呉繹の通志疏の末葉の裏面に「至治二年九月印造／江浙等処行中書省所委官将仕住郎太平路当塗県主簿袁矩／承務郎福建道宣慰使司徒元帥府都事江正／承務郎福建道宣慰使司徒元帥府都事紀昱／福州路総管府提調官経歴侯惟清／福州路総管府提調官知事楊也先／福州路総管府所委提調官福州路儒学教授李長翁／福州路総管府所委提調官福州路録事司判官蓋従杞」の八行がある。そのあと通志総序と通志総目録。

補写葉が三〇余あるが、その多くは版心に「通志原本欠」と刻されている。万暦末の印行時のものか。

「尊経／閣章」「学」（円）印。

又　至明崇禎元年遞修（巻一～六清補写）　一二四冊
内閣文庫蔵

後補淡茶色表紙（三四・三×二三・五㌢）。題簽「夾漈通志幾（冊次）」（墨筆）。

呉繹序、呉繹通志疏（至治元年五月）、鄭樵通志総序、通志総目録。そして巻一から六まですべて補写。欠葉も五〇余ある。補刊年記が万暦一〇・一四・一七・一八・二二・二三・二四・四五・四六・四七年、崇禎元年とある。

蔵印は「閩中蔣／氏三経／蔵書」「蔣絢臣曽／経秘蔵」「蔣琦／之印」（陰）「蔣氏珍／蔵書／籍私記」「絢臣／父」（陰）、「秘閣／図書／之章」「日本／政府／図書」。経籍訪古志巻三著録。

又　零本（存首目）　至治二年印　一冊
東京大学東洋文化研究所蔵

後補淡茶色表紙（三四・七×二二・一㌢）。至治二年三山郡斎の呉繹の序、至治元年の呉繹の通志疏、至治二年九月印造および列銜七名との八行、鄭樵の通志総序、そして通志総目録を収める。

「乾隆／御覧／之宝」（楕円）「天禄／継鑑」（陰）、「天禄／琳琅」の璽印。

又　零本（存巻九四・九五）　一冊
東京大学東洋文化研究所蔵

後補青色絹表紙（三四・八×二三・一㌢）、題簽「列伝七八（戦国前漢）九十四　五」と墨書、右下に「宝翰堂／蔵書印」を捺す。冊首に「竪／慕斎／家」（円）「宛平王／氏家蔵」（陰）印。大倉本との関係は不明。補刻葉はないが、かなり後印。

**東都事略**一三〇巻（欠巻八六～九三）　宋王偁撰　〔南宋中期〕眉山程舎人宅刊　（巻一～一〇・一二・一四～二〇・六二～六六・七一・七二・八一・八二・九四～九九・一一六・一一九・一二〇・一二三・一二九補写）　一四冊
宮内庁書陵部蔵

後補薄茶色表紙（二三・六×一五・四㌢）、題簽「東都事略一」のように墨書。裏打。料紙は天地とも数ミリ小さく、高さ二三㌢。副紙の裏葉に「顔氏家訓曰借人典／籍皆須愛護先有欠／壊就為補治此亦士／大夫百行之一也／（低二格）鄞江衛氏謹誌」の印記があり、この周囲に狩谷棭斎が「此印記以間好事者之仮造不

存而可也」と記す。校斎は更に「東都事略宋刻僅見此本／先君最所宝愛栄本楼／牙籤万軸独欠此書牧翁／屢〻求不獲心頗嗛焉先君／家道中落要素頻煩始／終不忍捐棄吾子孫其／愼守之勿失／(低二格)右見読書敏求記按近来富宋本者無銭遵王若也／然其言如此則当宝蔵可知也故表出之示後之獲此者」と識している。

東都事略目録、全二九葉。列伝には字が墨書されている。尾題の次に「眉山程舎人宅刊行／已申上司不許覆板」の双行木記がある。次いで洪邁の奏進劄子、告詞、王偁の謝表が続く。

本文巻首は「東都事略巻第一／(低四格)承議郎新権知竜州軍州兼管内勧農事管界沿辺都巡検使借紫臣王偁上進」とあるが補写で、巻一一の首葉は左右双辺（一九・二×一二・五チン）、一二行、二四字。版心は白口、上象鼻に字数、双黒魚尾の間に「東十一　（丁付）」の題。線黒口で字数のない葉もある。なお静嘉堂本の巻一一首葉の匡郭の寸法は、一八・四×一二・四チンである。なお王偁を中央本は稱に、静嘉堂本は称につくる。

標記の補写巻のうち、巻三の第三・六・七葉、巻一二〇の第三・四葉だけは存する。他に巻一三—四・八、一二一—五、一二—六五、一三〇—一葉が欠。

欠画は　玄鉉朗　敬驚　弘　貞徵　勗　煦　完　惇敦字に行われている。経籍訪古志巻三著録。

「秘閣／図書／之章」「帝室／図書／之章」の二印を捺す。

東都事略の宋刊本は大陸にはなく、台北の中央図書館、書陵部、静嘉堂各蔵の三部が現存し、いずれも眉山程舎人宅刊行の同型の木記をもち、行格その他もまったく共通する。しかしすでに中国訪書志等に指摘されたように、その字様は三本ともに微妙に違ってそれぞれ別版であり、たがいに覆刻あるいは補刻の関係にあるらしいのである。

結論から言って、この三本は相互に覆刻であって補刻ではあるまい。中央本がもっとも早く、書陵部本はかなりこれに近く、静嘉堂本はどちらからの覆刻かはわからないが、後刻であろう。

この書陵部本の字様は中央本とかなり似ているが、あらゆるところでわずかに異り、略字を用いている場合が少なからずあり、巻七七の尾題が中央本で「七十七」とあったものを「七七」と、あるいは七八では「巻」の字を略記したりしている。これらの相違は特定の葉でなくてほぼ全巻に及んでおり、かなり漫漶の葉もあるが、補刻と認められるところはない。

ただしこの本には特に巻六一・七一の一部に蜀風の字様があるものの、全体としては建安の風に近いのであって、私は木記

の蜀刊には疑問を抱く。中央本自体も多分に建風を帯びているがこれはおくとして、この本は眉山程舎人宅刊本を福州建安で覆刻し、木記は旧書のものをそのまま残したのではないかと推測できないこともない。少くとも次掲の静嘉堂本はおそらくそうであろうと思うのである。

**同**　〔南宋中期〕覆宋眉山程舎宅刊本（巻八～二九・七六～八三・一〇六～一一五翻刻本補配）　二〇冊　静嘉堂文庫蔵

金切箔散藍色表紙（二四・四×一五・四チン）、金鑲玉装（料紙高さ二二・五チン）。

洪邁の奏進、告詞、王偁の謝表は補写。東都事略目録も首二葉まで補写であるが、以下は存する。尾題の後に「眉山程舎人宅刊行／巳申上司不許覆板」の木記があり、中央本、書陵部本のものと極似するが、わずかに異っていて覆刻である。

「東都事略巻第一／（低四格）承議郎新権知龍州軍州兼管内勧農事管界沿辺郡巡検使借紫臣王称上進」。王偁の名を稱と誤るのは中央本も同じであったが、この本は略字にしている。以下の巻は主題だけで王偁の銜名は略されるが、世家一と列伝一の巻一三と一八にはこれがあり、これらは補配本の巻であるが、偁と繁体字が用いられている。

左右双辺（一八・八×一二・七チン）、一二行、二四字。版心線黒口、ときにその上半を白口にして字数を刻し、双黒魚尾、題は「東幾」。

補配の二八巻を除く巻には、料紙がA白く薄手のものと、B黄色味がかり、やや漫漶の進んだ葉を含むものとの二種があり、寄せ本のようであるが、別版ではない。Aには「趙宋本」「汪士鐘印」「藝芸主人」の汪氏の三印が、Bには蔡氏の多種の印と「汪士鐘蔵」印が捺されている。汪氏が蔵印を使い分けたのは、Aの方が紙も良質で早印であるからであろうが、蔡氏の諸印がAにないから、取合されたのは更に後のことか。

別版補配は標記の二八巻の他に、巻三〇第七葉、三二第一・二葉、一三〇第三葉にもあり、巻三二首葉の眉上に「二頁／欠此」と朱書されている。字様は浙風で、紙もやや後代のもので、明らかな別版である。ただし行格はまったく同じく、宋諱欠筆煦も昺惇敦廓等の字に行われており、広義には覆刻と言えなくもない。版心は線黒口であるが、上象鼻の上半の字数のところは白口。陸氏の印しか捺されていない。字様は一見したところ

では版心の字数も含めて南宋中期の浙刊本を思わせるが、紙質からみるとそれを模した後代（元か明か）の刻であろう。

刻工名はＡＢの版にわずかに 范刊 乙 があるだけであり、欠画も惇 敦字まで、補配本が廓字を欠いている。

蔵印は先に触れたように、「趙宋本」「汪印／士鐘」（陰）「藝芸／主人」と「佞宋」（陰）「汪士鐘蔵」（陰）、「□□／図書」の大型官印、「宋本」（楕円）「蔡／廷楨」「卓／如」（陰）「廷／相」（陰）「伯卿／甫」「筠／生」「瑞／卿」「蔡印／廷楨」（陰）「卓如／真賞」「翰墨／縁」（陰）「金匱蔡氏醉／経軒攷蔵章」「金匱／蔡廷／楨蔵」「醉経／主人」（陰）「梁渓／蔡氏」。

巻三九と巻八七下の後の副紙に、黄丕烈の手跋二則があり、後者に丁卯（嘉慶一二年、一八〇七）の日付が入っている。当時すでに二本を合せたらしい経緯などが識され、おそらく同版の早印本と後印本とであろうが、その二本の取合せが具体的によくわからない。全文が静嘉堂宋元版図録の解題篇に収録されている。

## 雑　史　類

**国語二一巻　補音三巻　呉韋昭注　（補音）宋宋庠撰**

〔南宋前期〕刊〔南宋中期・元・明〕遞修　一二冊

静嘉堂文庫蔵

後補暗褐色表紙（二七・九×一七・八チセン）、襯装。

本文首題「周語上第一　国語　韋氏解」。左右双辺（二一・四×一四・八チセン）、一〇行、二〇字・注文小字双行。版心 白口、単黒魚尾、「国語幾　（丁付）」と題し、下方に刻工名を刻る。元明の修葉に双魚尾のものが多く、南宋中期修葉から上象鼻に大小字数が入る。

宋諱欠筆は 玄 敬 儆 殷 匡 竟 境 胤 恒 徵 讓 頊 桓 慎 鶉 字に行われる。刻工名は、原刻が 王玠 王寔 江泉 李臬 李棠 卓宥 張明 駱元、南宋中期修が 徐文 徐義 馬松 陳彬 劉宝、元修が 今友 文玉 王六 王栄 王寿三 朱曽 江厚 李祥 李徳瑛 洪福 范太 范茂 范雙評 茅文竜 盛允 曹栄 蔣蚤 繆珍 魏海、明修は監生の二字を冠するから版下抄手であろうが、留成 陳浚 秦淳 鄧志昂。卓宥の刻葉に慎字欠画がある。北京図書館蔵本は元までの遞修本であるが、中国版刻図録（図三一）の解説は、南宋初葉杭州地区良工、南宋中葉杭州補版工人、元時杭州補版工人と称している。ただしこの本は明修が多い。

尾題は「越語下第二十一　国語」。次に国語補音叙録があり、「補音巻第一」と題して補音三巻がある。

蔵書印は「宝晋／山房」「小山／労長／齢章」（陰）「閩楊浚雪滄／冠悔堂蔵本」、「虞山孫氏慈／封丙舎図書」「虞山孫仲／孝維収／蔵図書」、「主司巷旧家」「西斎」「松帰／郡」「李印／承祖」「子〻孫〻／承之／□□」、「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰）「臣陸／樹声」（陰）「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」（陰）。

伝本は少く、台北の故宮博物院沈氏研易楼の補音三巻が原刻、前述の北京図書館本が宋元遞修、他は至明修であるが、それも次掲本の外には台北の中央図書館本しか存在が確認されない。

又　至明弘治一七年遞修　八冊　大倉文化財団蔵

後補灰色表紙（二九・八×一八・六チセン）、金鑲玉装（料紙高さ二四・八チセン）。「依宋本校国語少山珍蔵」の外題、右に「一三二四五国語魯語」と墨書した元表紙を剝がしたらしい一紙が、副紙に包まれている。次紙に「国語注及音渕如為恂斎主人題」の題簽を貼り、「丁少山」の白文印をそれと台紙の双方にかけて捺す。その左に「此孫渕如先生手題本在函外光緒三年／五月廿八日得此書於歴城西門内先生手跡／恐有剝落因移於此少山尋記」との丁少山の手跋がある。

韋昭の国語解叙、国語目録があって本文。首葉から弘治一七年修葉で、白口の版心上象鼻にその補刊記があり、下象鼻に監生鮑捷の名が入っている。この期の監生に他に王言、蔣纓らがいる。これより多いのが粗黒口の明修葉で、監生鄧志昂、留成、陳浚、秦淳などの名があり、弘治よりやや早い時期のものと思われる。原刻葉はおそらく絶無で、ごく少い比較的古い白口の葉も南宋中期か元の修であろう。江和、范太らの刻工名がみえる。補音三巻が終った次葉に、「右国語二十一巻補音三巻刻自元大徳間歳久／欠壊不便観覧大司成蘭渓章公与小司成泰和／羅公謀補刊之命鏞召匠重刻七十五板修刻六／十八板遂成全書二公之心可謂公且仁矣継二／公者皆以二公心為心庶是書可永頼云／弘治十七年七月既望／南京国子監監丞赤城戴鏞識」と弘治一七年の修について述べられている。

全巻の随所に朱筆で校字が書入れられ、巻二一末に丁少山が次のように朱書している。「天聖七年七月二十日開印／江陰軍郷貢進士葛惟肖再刊正／鎮東軍権節度掌書記魏庭堅再詳／明道二年四月望日得真本刊正増較」。

蔵印は「艮善／印信」（陰）「東呉／高氏」、「道甫／曽経／借

閲」（厳長明）、「丁／少山」（陰）「少山／攷蔵」、「大倉／文化／財団」。

**戦国策**一〇巻　宋鮑彪注　元呉師道校注　明覆元至正二五年平江路儒学刊　一〇冊　静嘉堂文庫蔵

後補寿字及草花文淡紅色表紙（二五・六×一六・八チセン）、襯装。宋紹興一七年の鮑彪の序、次で曽鞏序、劉向序について「見前」とある。元泰定二年の呉師道の国策校注序、至正一五年の陳祖仁の戦国策校注序、戦国策目録、校正凡例と続く。

本文巻首「戦国策西周巻第一／（低八格）縉雲鮑彪校注／（同）東陽呉師道重校」。左右双辺（二〇・七×一四・六チセン）、一二行、二〇字・注文小字双行。国名を低二格で始め、本文・注文も第二行以下は低一格とし、王名は低三格とする。版心　粗黒口、双黒魚尾の中間に「国策巻一　（丁付）」のように題する。

全巻に朱句点を施す。

「戦国策宋衛中山巻第十終」の尾題に次で、李文叔の書戦国策後、王覚の題戦国策、孫元忠の書閣本戦国策後、孫元忠の記劉元父語、紹典丙午の姚宏題、至順四年の呉師道識、さらに呉師道又識（末半葉補写）と続く。

刊記が各巻末の六箇所にある。すなわち各三に「乙巳前藍山書(院山長劉鏞重）校正」（（　）内は破損）、巻四、五に「至正乙巳前藍山書院山長劉鏞重校勘」、巻六に「前藍山書院山長劉鏞重校勘」、巻八・一〇に「平江路儒学正徐昭文校勘」である。このために至正二五年（一三六五）平江路儒学刊本と誤認されることになる。

字様はやや漫漶が進み、原刻かと訝るところもあるが、補刻葉はない。

「青浦／王昶字／曰徳甫」「一字述／庵別号／蘭泉」の印は、印文は異るが汲冢周書と同じ清の王昶の旧蔵書である。他に「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」。

この本は元至正二五年平江路儒学刊本でなく、その明前期ごろの覆刻本である。中国訪書志の故宮博物院本の解題、鉄琴銅剣楼元本書影（巻一首二葉）、旧京書影（341）～（343）（巻四之一表・三〇裏・六八表）によれば、元至正刊本の版心は線黒口、単黒魚尾で、上象鼻に大小字数が、下象鼻に刻工名があり、また耳題を刻するところが相違する。各巻末の刊記は同一で、字様も似てはいるがやや劣り、覆刻の風が顕著である。四部叢刊本も同版。

又　一二冊　大倉文化財団蔵

後補紫味灰色表紙（二九・八×一八・七㌢）、金譲玉装（料紙高さ二六・五㌢）。

宋の鮑彪、元の呉師道と陳祖仁の序の類は、順序は異るが前掲書に同じ。ただし巻末には序跋、題など一切ない。

原刊の元至正二五年の校勘、刊記は、静嘉堂本より巻六・八のものが削除されている。

蔵印は「孫印／星衍」（陰）「孫印／星衍」（陰）「孫氏／伯淵」（陰）「伯淵／宋元／秘笈」「東魯観／察使者」（陰）、「執法／僊官」「彭宗／因印」（陰）、「季親／甫」「紹川／私印」、「大倉文化／財団／蔵書」。

## 詔令奏議類

**国朝諸臣奏議**一五〇巻首目三巻　宋趙汝愚編　宋淳祐一〇年（一二五〇）福州路提挙史季温刊　元大徳・至大・元統遞修　六四冊　静嘉堂文庫蔵

後補青緑色花文絹表紙（二九・五×一九㌢）、襯装。淳祐庚戌（一〇年）史季温序（補写）、同趙希瀞序（補写）、淳熙一三年（一一八六）乞進皇朝名臣奏議劄子、趙汝愚の進皇朝名臣奏議序、国朝諸臣奏議総目（部門別）、同（人名別、首二葉補写）、国朝諸臣奏議目録（第三六巻から乙集、七八巻から丙集）。

本文首「国朝諸臣奏議巻第一／（低二格）竜図閣直学士朝散大夫成都潼川府夔州利州路安撫制置使兼知成都郡府事兼／（同）管内勧農使充成都府路兵馬都鈐轄祥符県開国伯食邑九百戸臣趙汝愚」の題。この二行に三行分を用い、界線がない。巻二以下は首題だけで、趙汝愚の官銜は略す。

左右双辺（二二・七×一五㌢）。一一行、一三字・注文小字双行。版心　白口、双黒魚尾、「第一巻（一巻・巻一）」のように題し、上象鼻に字数を、下象鼻に丁付と刻工名を刻する。

字の宋朝に渉るときは、上を空格。宋諱欠筆が稀にあり、慎敦廓等の字にみられるが、宋諱に当る文字は避けてあまり用いないらしい。刻工名は

2丁子正　丁正　3上宮　子正　子政　4仁仲　元茂　王生　王辰　王宸　王徳　6有才　江才　江亮　7何埜　呉生　呂拱　李定　辰賜　8周禾　周和　和叔　官安　定夫　林文　林文成　林文茂　林富　9胡仁　胡正　范賢　10倪仁　倪耑　倪端　徐自　純祖　11張明　張泗　張得　張賜　章淳　陳元

陳元茂　陳文　陳采　陳洪　12黄道　13楊亨　楊慶
葉才　葉安　葉賓　葛文　虞仲　15魏文　劉魏文
蔡青　蔡清　鄧安　鄧志　鄧埜　鄧覚　鄧堅
鄧学　鄭全　鄭信　鄭堅　鄭統　鄭栄　鄭礼
16盧老　17魏文　（以上原刻）
4文茂　王昭　5仲生　正卿　7呉才　呂生　君玉
李宝　君裕　肖秀夫　8官安　9兪生　兪富　11陳用得
陸元茂　15劉公亮　劉純文　蔡文茂　（以上補刻）

補刻葉のうちに、版心下象鼻に大徳四年（一三〇〇）九月、至大元年（一三〇八）、元統二年（一三三四）の補刊年記の入った葉がある。正卿は至大元年の刻工である。さらに巻八二の尾題下に丁付と「大徳四年九月補刊」と刻したあと、空二行で「福州路儒学教劉道内命工刊補」の一行があり、巻一四七尾にも同様に「大徳四年九月　日／福州路儒学教授劉直内命工刊補」とある。

南宋後期刊本は刻工名をあまり刻さないから、他の本のそれとなかなか合致しにくいが、この国朝謂臣奏議は大部なだけに次のように合う。まず静嘉堂文庫蔵の古霊先生文集は拡　馴　の両字を欠画するから南宋末期の刊本であるが、江亮　紀父　倪仁　倪端　周和　陳文　葛文　楊亨　楊慶　鄭全　鄭統　盧老　魏文　の名が共通する。元修刻工に君佑がいるが、これは君祐とは別人であろう。次で台北の中央図書館の押韻釈疑で、嘉熙三年（一二三九）序刊、元の元貞二、大徳三年遞修と補刻の時期も近いが、原刻刻工に周和　張得　倪端　張得　葛文　楊亨　楊慶　魏文がいる。また南宋後中期福唐郡庠刊の前後漢書に江才　張得　葛文　陳才　楊慶　鄭全　鄭信が、同じ淳祐ごろ武夷詹光書堂刊の資治通鑑綱目（故宮博物院蔵）に上官　子政　呉生の名が見える。いずれも淳祐年間（一二四一～五二）前後の刊本の者たちであり、この本の淳祐一〇年刊は動かない。元大徳・至大・元統の補修はその年記で明らかであり、あるいは福州路から杭州の西湖書院に版木が移されてこれが行われ、南雍志経籍考に著録されるように明の南京国子監に伝えられたものであろうか。

尾題は巻一四九・一五〇とこれを欠くが次掲のお茶の水図書館と京都大学人文科学研究所の蔵本には「国朝諸臣奏議巻第一百五十」とある。

蔵印は「隆慶壬申夏提学副使／邵昞理書籍関防」、「葉氏／菉竹堂／蔵書」（円）、「田耕／堂蔵」、「張印／敦仁」（陰）「陽城／張氏／蔵書」、「杲賢」、「葆穂／之印」（陰）、「郁印／松年」（陰）

「上海郁／泰峯手／校秘本」「泰峯／所蔵／善本」「泰／峯」。

完本は少いが、残・零本も含めて台湾に六部、大陸に一二部も存する。ただしいずれも元修、または元明遞修本である。

又　至明遞修　三〇冊

お茶の水図書館（成箕堂文庫）蔵

新補赤茶色覆表紙（二九・七×一八・二チセン）。後補亀甲文繋黄土色表紙、外題「国朝諸臣奏議幾之幾」、右肩に小題を墨書。

序は趙希瀞、史季温の順、乞進皇朝名臣奏議劄子、進皇朝名臣奏議総目、国朝諸臣奏議目録（甲～丙集）があって巻一本文。

人亮　公亮　秀父　李宝　姚仲宝　徐自　兪止　曹庚　鄭堅などの刻工名が見つかったが、原刻と元修との区別が必ずしも明瞭でなく、あるいは元の刻工かも知れない。

稀に粗黒口の葉があるが、明修であろう。

欠葉がかなり多く、約四〇葉に及ぶ。巻八二末葉もそうで、そのために「福州路儒学教授劉直内命工刊補」が巻一四七にしかない。

蔵印は蘇峰のものばかりで、「蘇／峯」「蘇／峯」「蘇／峰」「徳富／氏印」（陰）「蘇峰学人／徳富氏愛／蔵図書記」「成箕／堂主」（陰）「成箕堂」。

又　残本（存巻八二～八八・九七～一〇〇・一一二～一一四・一一七～一二二・一四五～一五〇　計二四巻）

元大徳・至大・元統遞修　一六冊

京都大学人文科学研究所蔵

後補金切箔散黄土色表紙（二七・八×二三・三チセン）、襯装。

第一冊は国朝諸臣奏議丙集目録（第七八～一一九）、第二冊が丁集目録（第一三〇～一五〇）と巻八二本文。巻一四七尾欠。

又　巻六七零巻（欠首二葉）

京都大学文学部蔵

新補青色表紙（三七×二〇・九チセン）、裏打補修。十硯斎文庫本。

**陸宣公中書奏議**　零本（存巻五・六）　唐陸贄撰　〔南宋〕刊　一冊

静嘉堂文庫蔵

後補金切箔散濃藍色表紙（二五×一五・四チセン）、金鑲玉装（料紙高さ二三チセン）。

首題「陸宣公中書奏議第五」。双辺（一六・六×一一・三チセン）。一二行、二二字。版心　白口、双黒魚尾、題「乂上」、下象鼻に丁付と字数、ときに刻工名。字数と刻工名が連る場合がある。字様は端正。刻工はすべて単字で、正 宋 杲 梁 潘。玄眩懸弘殷慇 匡恇恒 貞徵 署樹竪 讓煦 桓完 構 慎 字を欠画し、かなり厳格であるが、敦・郭字は現れない。

巻五は「論裴延齡姦蠹書」「論朝官欠員及刺史等改転倫序状」の二首、巻六は「均節賦税恤百姓六条」を収め、それぞれ二〇葉と一九葉。奏草六巻を合せた一二巻、または制誥を含めた二二巻本の残存であろうといわれる（山城喜憲　陸宣公奏議諸本略解　斯道文庫論集一七輯　一九八一年）。同版本は他にない。

蔵印は「馬／玉堂」（陰）「笏／斎」、「中呉毛敬叔／攷蔵書画印」、「稽瑞楼」、「湖州／陸氏／所蔵」「陸民／伯子」「三品風／憲一／品天民」、「陸印／心源」「存斎／読過」「十万巻楼」「存斎四十五歳小像戊寅二月某石并刊」（横書・肖像）。

字様はすこぶる端正であるが、筆勢の乏しいこと、四周双辺であることから、南宋前期というより中期にかけての刊とみるべきか。

次掲本とともに山城氏の論考に多くを委ねる。

**註陸宣公奏議**一五巻　唐陸贄撰　宋郎曄注　宋謝枋得批点　元至正一四年（一三五四）建安劉氏翠厳精舎刊

四冊　　静嘉堂文庫蔵

後補金切箔散黒色絹表紙（二三・九×一五チセン）、襯装。

首に唐権徳輿の註陸宣公奏議序、序末の裏葉に八行の木記があり（国立中央図書館金元本図録・中国訪書志・陸宣公奏議諸本略解に移録）、その末行に二格を低して「至正甲午仲夏翠厳精舎謹誌」とある。（第七行末五字は刪節か。）（朗）曄の経進唐陸宣公奏議表、蘇軾等の進読奏議劄子、註陸宣公奏議目録と続く。

本文首題は「註陸宣公奏議巻之一」。双辺（一八・二×一一・八チセン）、一二行、二三字・注文小字双行。版心　小黒口、双黒魚尾、その中間に「奏一」のように題し、下に丁付を刻する。眉上に謝枋得の批語を行二字で記し、ときに界線に傍線を重ねる。巻一末に双行の双辺木記があり（序末のものより一回り小さいが外郭一一・六×六・二チセンと大きい）、「至正甲午仲夏／翠厳精舎重刊」とある。楹書隅録巻四がいうように、南宋後半期建刊本の覆刻であるかも知れない。

全巻に朱句点、朱引が施され、墨補筆も少くない。

尾題は「註陸宣公奏議十五巻終」。

蔵印は「楚姓／後裔」（陰）「四十以／後号／再已翁」「呉氏／恭父」（陰）「二労／山樵」（陰）「銕漢」「学古人」（陰）「元功／之章」（陰）、「三品風／憲一／品天民」「陸印／心源」「子剛／父」「存斎／読過」「湖州／陸氏／所蔵」（陰）「存斎四十五歳小像（横書）戊寅二／月某石／并刊（小）（肖像）」「十万巻楼」。

劉曄注本には宋紹熙刊の経進新註唐陸宣公奏議二〇巻があるが、巻数も行格も異る。台北の中央図書館の二部（一部は存首一巻）と故宮博物院の沈氏研易楼本については、中国訪書志等に解題があるが、大陸には北京図書館の二部をはじめ、計八部が存するようである。

**石林奏議**一五巻　宋葉夢得撰　葉模編　宋開禧二年（一二〇六）跋刊　二冊　静嘉堂文庫蔵

後補切金箔散薄青緑色絹表紙（三一・四×二〇・七チセン）、襯装。

副紙に咸豊五年（一八五五）、後に長文の跋を寄せる胡珽が、文献通考巻二四七から石林志愧集自序を録出して、倣宋体で写して附録としている。石林奏議目録。

本文巻首「石林奏議巻第一／（低一六格）模編」。左右双辺（二四×一六・四チセン）、一〇行、二五字。版心　白口、単黒魚尾、「石林奏議巻幾　（丁付）」と題し、刻工名を彫る。

語の宋朝に渉るときは上を空格とし、宋諱の字は「御／名」と割注にする。これが二〇箇所ほどもあり、「御嫌／名」の一例がある。

刻工は、王仲　王震　周才　周信　林檜　金桷　金沢　徐良　陳成　陳亨　陳偉。版心の破損が著しく、刻工名の残るものは少い。本文も一葉の内の部分がしばしば欠け、補筆されている。巻一五の第三葉以下が欠。王仲は越刊八行本の周礼疏、南宋前期両淮江東転運司刊漢書、淳熙四年撫州公使庫序刊の大易粋言に、王震は南宋初期刊の思渓版と新唐書、紹定二年（一二二九）呉郡志に、周才は嘉泰四年（一二〇四）跋刊の東萊呂太史文集に、周信は淳熙九年（一一八二）江西漕司刊の呂氏家塾読詩記に、徐良が両淮河東転運司刊漢書の南宋中期修にその名がみえる。南宋初期の刻工とも一致するが、開禧を降る者はおらず、次の同二年の跋の際の刊とみてよかろう。

巻末に「開禧丙寅六月既望姪孫朝奉大夫改差権知台州軍州兼管内勧農事借紫箋謹書」（二年・一二〇六）の一四行（無界）

がある。中央部が過半、損われていて、その文はほとんど不明であるが、葉夢得の姪孫の葉箋が出版について述べているようである。

そのあと清咸豊五年の葉廷琯と同六年の胡珽のかなり長文の識語があるが、いずれも静嘉堂文庫宋元版図録の解題に全文が録されている。胡珽跋には旧蔵者の李先開が嘉靖八年の進士、黄省曾が同一〇年の挙人であることに触れている。

蔵印「李先／開印」、「姑蘇／黄省／曾印」、「呉雲／私印」「呉雲字／少青号／平斎晩／号得楼」「呉平／斎読／書記」「両罍軒」「両罍／軒蔵／書印」、「汪」（円）「文／琛」（陰）「平陽汪氏／蔵書印」「汪印／士鐘」（陰）「又字／閬源」（陰）「宋本」（楕円）「胡珽／蔵書」「琳琅／秘室」、「玉潤／書堂」、「三品風憲／一品天民」「湖州／陸氏／所蔵」（陰）「陸印／心源」（陰）「存斎／読過」「存斎四十五歳小像（横書）戊寅二／月某石／并刊（像）」「十万巻楼」「儀顧堂」。

同版本はもとより他に刊本がなく、光緒一一年（一八八五）に陸心源が校葊宋楼重雕として覆刻を行った。なお、中国古籍善本書目には汲古閣影宋鈔本が中国社会科学院文学研究所、清鈔本が北京図書館蔵として著録されている。

## 伝記類

**新刊名臣碑伝琬琰之集** 前集二七巻 中集五五巻 下集二五巻 宋杜大珪編 〔南宋 蜀〕刊（巻一一補写）

静嘉堂文庫蔵

後補金砂子散薄水色表紙（二七・一×一七・五チセン）、襯装。宋紹熙五年の杜大珪の自序。「新刊名臣碑伝琬琰之集目録上（中下）／（低一一格）眉州進士杜 大珪 編」。それぞれ前・中・下集の首にある。

これに対して本文巻首は「新刊名臣碑伝琬琰之集巻第一」とあるだけで、編者の名を掲げず、また中集、下集の各巻首にも中・下の別を記さない。

左右双辺（一八・七×一二・九チセン）、一五行、二五字。版心白口、双黒魚尾、題は「宛炎幾」、そのほか宛名・琬琰名・琰など、下象鼻に丁付とごく稀に立可 何の刻工名。題にはやはり上（前）中下を刻さない。

語の宋朝に渉るときは上を空格にするが、宋諱を欠画をするのは稀で、桓 完 慤 慎 のごく一部にあるにすぎない。巻九第一葉表に「太上皇帝御名」とあるのは、依拠した本にすでにこうなって

いたものと思われる。桓慎字を円で囲む例もある。

中集巻四八第一葉裏がまったく空白。稀に墨釘のところがある。補写は巻一一のほか、巻八第七葉、一〇―五、一二―一～四・一〇、二三―六、二五―五、二六―二、中集四―六・七、九―三、二二―五、二五―二～四、五五―二五・二七、下集一一―五、一五―五、一九―七、二〇―一、二三―二。

蔵印は「当湖胡／篆江珍蔵」（陰）「胡印／惠孚」（陰）「篆／江」、「帰安陸／樹声蔵／書之記」「帰安陸／樹声叔／桐父印」「臣陸／樹声」（陰）「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」（陰）。

同版本は、台湾所在ですでに調査されたものが中央図書館（残本）、同北平蔵（同）、歴史語言研究所（欠二巻）、故宮博物院沈氏研易楼（欠一巻）にある。一方、中国古籍善本書目には一二部が著録され、うち五部は元明遞修本であるという。原刻（無修）で完本は上海博物館、華東師範大、天一閣文物管理所にあるとされ、北京図書館蔵本は残本（欠中集三一巻）が無修であるが、完本は上海図書館本とも元明遞修とある。

宋刊の別本とは、北京図書館善本書目によれば行格は同じで、「新刊」の二字が冠されていないようである。

**五朝名臣言行録** 前集一〇巻 後集一四巻（欠巻一〇～一四） 宋朱熹撰 皇朝名臣言行録（続集）八巻（別集）二六巻（上下各一三巻）皇朝道学名臣言行外録一七巻 宋李幼武撰 〔元〕刊（外録巻一二～一七補写）

一二冊　　内閣文庫蔵

後補香色表紙（二三×一五・一センチ）、外題「五（皇）朝名臣言行録前集一之五」のように墨書、裏打補修。

宋宝祐戊午李居安叙、朱熹序。五朝名臣言行録総目の首に「晦庵先生朱熹纂集／太平老圃李衡校正」とある。

本文巻首は「五朝名臣言行録前集巻第一」。左右双辺（一九・七×一二・四センチ）、一二行、二三字。版心の題はそれぞれ言行前幾、言行后幾、言行売幾、言行別幾、言行外幾のように刻するものが多い。

李幼武の続集の巻首はほぼ「皇朝名臣言行録巻之一」のように題し、別集はそれに「別録」と附すのが多いものの、首二字を「四朝」「宋朝」「宋」としたり、「皇朝中興名臣言行録」と称するものがあって一定しない。別録はだいたい「皇朝道学名臣言行外録」と題し、その他にも多少の変化がある。

全巻に朱句点、朱引、朱の圏点・傍線が施される。

蔵印は「梅熟軒」「慈照院」、「仁正侯長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」、「浅草文庫」「日本／政府／図書」。

巻末副紙に市橋長昭の寄蔵の跋文。

中国には上海図書館と中山大学図書館に完本が、北京・北京大学・浙江・安徽省図書館に残本があるとされる。

**国朝名臣事略** 一五巻　元蘇天爵撰　元元統三年（一三三五）建安余志安勤有書堂刊　二冊　内閣文庫蔵

後補淡褐色表紙（二六・七×一六チセン）、外題「国朝名臣事畧一之七（八之十五）上（下）」と墨書。

第一冊にはその右に「元統乙亥刻」とあるが、これは市橋長昭の筆ではないかといわれる。

元至順壬申許有壬叙（欠首二葉）、天暦己巳欧陽玄国朝名臣事略序、至順辛未王理叙、天暦二年王守誠識。

国朝名臣事略目録。その末葉、尾題のあとに空三行で二行に跨って、「元統乙亥余志安刊于勤有書堂」の刊記がある。

本文首題「国朝名臣事略巻第一／（低八格）趙郡蘇天爵伯脩輯」。

双辺（一九・六×一二・二チセン）、一三行、二四字・注文小字双行。

版心　細黒口、魚尾は上方になく、横線を引いて「名臣事略（巻）幾」の題、下魚尾の下に丁付を刻し、大小字数や刻工名はない。語の元朝に渉るときは改行。

全巻に朱句点、朱引、傍線が施される。

尾題「国朝名臣事略巻第十五」。

巻末の副紙に「寄蔵／文廟宋元刻書跋」と題する文化五年二月の下総守市橋長昭の跋文九行（市河三亥筆）があり、他の長昭寄贈書のものと同文。

「仁正侯長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」、「浅草文庫」「昌平坂／学問所」「日本／政府／図書」印。

中国には意外に伝本が少く、台北の中央図書館と北京図書館の二部を存するだけのようである。台北（学生書局）、北京（中華書局）に影印本がある。

**又**　四冊　静嘉堂文庫蔵

後補金切箔散黒色表紙（二七・八×一七・三チセン）、襯装。

欧陽玄と王理の国朝名臣事略序があって、許有壬と王守誠の序を欠く。

一部に墨付が悪く下半を補写した葉があるが、概して墨色が濃く、かなり早印の本にみえる。

巻末に道光一六年馬玉堂跋があって、武英殿聚珍版には脱誤

の多いことをいい、「翰墨／奇縁」（陰）印を捺す。

他に蔵印は「馬／玉堂」（陰）「漢唐斎」（陰）「笏／斎」「笏斎／珍蔵／之印」「古塩／馬氏」、「呉江／淩氏／蔵書」「淩淦字／麗生一／字礪生」、「鷗寄／室王氏／所蔵」、「帰安陸／樹声蔵／書之記」「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰）「臣陸／樹声」。

**欧公本末**四巻　宋呂祖謙撰　宋嘉定五年（一二一二）序

刊　二〇冊　　静嘉堂文庫蔵

後補黒切箔散黄色表紙（二九・四×一九・九センチ）、襯装。

本文首題「欧公本末巻第一」。左右双辺（二一・五×一五・四センチ）、九行、一八字・注文小字双行。版心　白口、黒双魚尾、「本末幾」と題し、上下象鼻に大小字数と丁付、刻工名とがある。巻二第二五葉表八行に頊字を「神宗廟諱」と、同九七葉裏三行に「（王貽永父）行賜名賜」に当る字（貞か）を「下一字犯仁宗嫌名」と避諱するほか、絃　畜　筐　懲　譲　桓完　構購　慎　敦　字を欠画する。なお、語の宋朝に渉るときは頭を空格とする。刻工名は、

3大中 4方中　方忠　方茂　王信　王茂 7呉彦　宋琳　宋蓁　呉政　呉珙　李忠　李珍 10徐中　徐宗　徐侑　徐通　17濮進

この一八人の刻工は南宋刊本の者と実に多く共通し、その一、一は挙げないが、数としてみると次のような具合である。越刊八行本注疏とは、南宋初期刊の周礼疏の中期修と一、紹熙ごろの中期に降る尚書正義と四、南宋前期浙刊七史（いわゆる眉山七史）の中期修と延べ一七、初期明州刊文選の前中期修と四、前期両淮江東転運司刊漢書の中期修と二（原刻も一）、前期贛州刊文選の中期修と二、嘉泰四年（一二〇四）新安郡斎刊皇朝文鑑三というように同名の刻工がいる。他に一人ずつ嘉定間刊の諸書と合う場合がいくつかあって、嘉定五年ごろの刊とみて妥当である。

巻末に「壬申嘉定五禩正月既望厳陵詹久民敬書」二一行がある。

巻二から三にかけて、「延祐四（五）年下（上）半年」のような年記の入った公牘紙の紙背がしばしば用いられている。元の延祐四年（一三一七）から一〇年以上後の印であることを示すが、嘉定からはすでに一世紀を経ている。

「高氏鄰酉／閣蔵書印」、「志宛斎／蔵書」、「昆陵／左／氏」（円）、「当湖小重山館／胡氏篆江珎蔵」（胡恵墉）、「臣陸／樹声」（陰）「帰安陸／樹声桐／父之印」の諸印を捺す。

佚存書。

**新雕名公紀述老蘇先生事実**　編者未詳　〔南宋〕刊

一冊　　静嘉堂文庫蔵

後補薄黒色表紙（二三・九×一六・一チセン）、襯装。全九葉。

「新雕名公紀述老蘇先生事実」の首題の次行、「（低四格）薦表（空六格）欧陽脩永叔」と各篇の題、本文に入る。

左右双辺（一八・五×一二・六チセン）、一四行二四字。版心　白口、双魚尾、「老蘇」と題し、刻工名はない。欠画は　玄弦眩　勗の四字だけ。国家　朝廷　聖時　聖慈　勅旨　宋　天子　仁宗　英宗と語の宋朝に渉る場合は改行または上を空格にする。

尾題「新雕名公述老蘇先生事実」。

内容は、欧陽脩の薦表、墓誌銘、張方平の墓表、曾鞏の哀詞并引、大資満の祭文、司馬光の武陽県君程氏墓誌銘である。

蔵印「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」（陰）。

字様は南宋前期建刊本のもので、瘦金体に近いが、やや中期に寄るか。

**鄂国金佗稡編**二八巻　続編三〇巻　宋岳珂編　明嘉靖二一年洪富覆元至正二三年西湖書院刊本　嘉靖三七年修

一二冊　　静嘉堂文庫蔵

明も嘉靖二一年（一五五二）の刊であり、静嘉堂文庫宋元版図録もこれを除外したが、かねて元刊本と著録されていたものであるから、ここではひとまず取りあげておく。

香色表紙（二七・五×一七・九チセン）。続編の第一冊（通算第七冊）にだけ、双郭で「金佗続編」という明印題簽がある。

宋嘉定一一年岳珂の鄂国金佗稡編序、元至元二三年陳基金佗稡編序に次で明嘉靖壬寅（二一年）張鏊の重刻金佗稡編序と嘉靖戊午（三七年）黄日敬の重校金佗稡編序がある。巻二八（前編末）の尾題の前に兵珂の後序と戴洙の金佗稡編後序。そして続編には首に宋紹定元年岳珂の戦国金佗続編序、巻三〇の尾題の前に端平元年岳珂の跋と、「維嘉靖二十一年歳次壬寅」に始る刊序と、後に嘉靖壬寅の洪富の重刻金佗稡編後序がある。鄂国金佗稡編目録。

本文巻首は「鄂国金佗稡編第一／（低一三格）岳珂編進」。巻二以下の第二行には低三格で「孫奉議郎権発遣嘉興軍府兼内勧農事」の一六字が「岳珂」に冠せられる。

左右双辺（二〇・二×一五・一チセン）、九行、一七字・注小字双行。版心は粗黒口、双黒魚尾で、「金佗稡編第一」のように

題し、丁付と、下方に単字の刻工名をしばしば陰刻する。

尾題は「鄂国金佗稡編巻第二十八」。

続編の首題は「鄂国金佗稡編巻第一／(低格三)孫朝請大夫権尚書戸部侍郎総領浙西江東財賦淮東／(同)軍馬銭糧専一報発御前軍馬文字兼提領措置屯田通／(同)城県開国男食邑三百戸賜紫金魚袋岳珂編次」、尾題は「鄂国金佗続編巻之第三十終」。

数字あるいは上半が墨釘の葉も多いが、九行の罫紙が無文字のまま挿入された、つまりは欠葉が四〇余がある。版心がすべて粗黒口で、大半は嘉靖二一年の刻葉であるが、それもかなり漫漶が進んでいるから、同三七年の補修を経て、明末に印行されたものと思われる。

刻工名はすべて単字で、子山仁王文世全江汗杉李侖昌青明奎良昂卿堂崇陶恵。むろん元版の王正 倪平山 士元 張君宝 陳予らの名はない。慎字を「孝宗御名」とするのが一、墩字を「光宗皇帝嫌諱」とするのが二例ある。これらは正続の両編に現れるから、宋端平の合刻本の名残りであろう。

蔵印は「静嘉堂蔵書」。守先閣本とされるが、清人のものはない。

元至正二三年西湖書院刊本については、中国訪書志に中央図書館本が解題され、そのフィルムが将来されている。これによれば版心が線黒口で、粗黒口のこの本と大きく異るが、匡郭の寸法が近く、行格は同じく、字様も似る。南雍志経籍考に「金佗稡編十巻(存者三百零三面 失一百五十二面)」「金佗続編十巻(存者三百四十七面 失者一百五十八面)」とあるから、元刊本の版木は嘉靖一〇年ごろに明の南京国子監に存したが、失者が約三分の一とあまりに多いために、南監二十一史などの補修が終ったあと、同二一年に全面的に改刻した。これが洪富の重刻金佗稡編序などに明らかなのであるが、この際に正続で六五〇面も残っていた版木をまったく見棄てたのか、比較的良好な版を引続いて用いることはなかったかに、わずかながら疑問が残る。しかし印面からは元版の残存は認められず、この本と同版の北京大学本も同様である。これら両版は欠葉の多くが同じ葉であるから、嘉靖以前の欠板を補えなかったのであろう。

中央図書館、北京図書館の善本書目、更には中国古籍善本書目とも、元至正二三年西湖書院刊本と明嘉靖二一年洪富刊本とを、はっきり分けて著録している。中央図書館には元刊本が一と明刊本が七、北京図書館には元版が二と明版が三部著録され、中国古籍善本書目となると、残本も含めて、前者が六、後者が

一五部に及ぶ。結局、この本も明嘉靖二一年に両浙塩運使洪富によって全面的に覆刻され、同三七年に黄日敬に修補された本となる。中国古籍善本書目著録本も一を除いて修補本である。

**新刊指南録四巻附一巻　宋文天祥撰　〔元末明初〕刊**

二冊　　静嘉堂文庫蔵

後補栗色表紙（二二・一×一三・四チセン）、襯装または金鑲玉装（料紙高さ二〇チセン）。徳裕二年（一二七六）の文天祥の新刊指南録序と同後序がある。新刊指南録目録。本文は巻一～四に附巻五が続く。

巻首「新刊指南録巻之一」。左右双辺（一五・四×一〇・六チセン）、八行、一六字。版心　線黒口、双黒魚尾、題「南一　（丁付）」、下象鼻にときに字数を刻する。

空格や墨釘の箇所が多く、それらは文天祥・呂师孟の名と北兵・北虜・虜師・虜酋・大酋・賊・逆賊等の字に相当するところである。わずかに北兵・数酋擠去などと残る場合もあり。聖旨など宋朝に渉る場合に稀ながら空二格とされる。宋刊本を元に入って印行するときに多くを剜去したともみられるが、字様は元末から明初の風であり、自序の徳祐二二年からして、いかに文天祥が尊敬されたにしても、残命数年の南宋で刊刻できたものか、また前記の字句を削除しても元の全盛期に印行が許されたものか。元の衰退期か明初に墨筆の入った本を底本として刊刻したものではないか、というのも推測にすぎないが、ともかくも〔元末明初〕刊とみる。

尾題は「新刊指南録巻之四終」、「新刊指南録附巻巻五終」。

蔵印は「宋本」（楕円）「毛」「晋」「毛氏／子晋」「毛晋／私印」「汲古／主人」、「平陽汪氏／蔵書印」「汪印／士鐘」（陰）「三十五／峰／園主人」「汪印／文琛」（陰）「民／部尚／書郎」、「竹塢／眞賞」「鶴安／校勘／秘籍」、「帰安陸／樹声蔵／書之記」「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰）、「静嘉堂文庫珍蔵」。

文天祥の詩の一部で、文山先生全集巻一八に相当し、伝記的要素を含みはする。四庫全書には未収であるが、儀顧堂続跋は集部別集に著録して宋景炎（徳祐二年）刊とし、静嘉堂秘籍志も集部別集であるが、静嘉堂文庫漢籍目録は史部伝記類と集部別集類の双方に掲げ、新刊の同図録では史部に収める。後代の版本（叢書も含む）についても北京図書館、内閣文庫はじめ、多くの目録は別集とするが、ここではあえて静嘉堂宋元版図録に従うこととした。